

Fate/EXTERIOR

ニカワ信者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人の嗜好は千差万別・多種多様。

私の好きが貴方の嫌い。貴方の好きが私の嫌い。そんな事が多々あります。

しかし今、声を高らかに宣言したい。

Fate／EXTRAシリーズにおいて「一番」なのは、赤セイバーでもキャス狐でも、金髪凛でも履いてないラニでもなく。

ましてや、甲斐甲斐しい野良小間使いから狂おしい悪役までこなすチョロかわ赤ランサーでもなく。

——ザビ子であると。

そんな気持ちを作り出した作品です。

EXTELLAのネタバレあり。

ザビ子×赤チャシカ認めんという人はGO BACK。

これも一つの可能性……と思える方だけ、お楽しみ下さいませ。

目次

第一話	1
第二話	40
第三話	77
第四話	139

第一話

ただいま、と。

誰に言うでもなく、自分は帰宅の挨拶をする。

マンシヨンのドア、と言われて誰もが思いつくだろうそれを開けた先にあるのは、質素なI D Kの部屋だ。

現在時刻は午後一時半。丸一日以上をかけた大仕事を終えた、しがたいサラリーマンを迎える、薄ら寂しい愛しの我が家。

当然、出迎えてくれる人も居ないので、溜め息と共に靴を脱ぐ。

ガサリ。手に提げたビニール袋と、仕事で使うバッグが音を立てた。

とにかく、疲れた。途中で仮眠を取ったから眠くないが、それでも疲労感が体に染みついていく。

これを洗い落とすには、簡単にでも食事を済ませ、暖かい風呂に入らなければ。

せつかく外はいい天気なのに、休日に布団すら干せない忙しさは、給料的には嬉しいが……。

いや、愚痴つてても仕方ない。食事の前に、まず風呂を沸かさないと。そう思い、いつもの定位置——ダイニングのソファへと、目も向けずにバッグを投げる。

「ふぎっし」

ぬおわっ。

ボスン、という落着音の代わりに、カエルが踏まれた時のような悲鳴が聞こえ、ビクツとしてしまう。

反射的に視線を向ければ、そこには小さな人影が寝そべっていた。

本人曰く、変装らしい紺のセーラー服。黒いハイソックスに、胸元を飾るのは赤いリボン。

顔はバッグで隠れて見えないが、薄茶色の、毛先が緩くウェーブしたロングヘアが、
彼女〃の特徴だ。

「……痛いです」

むくりと起き上がり、何故かバッグを保持、顔を隠したまま、眠っていたらしい少女は声に怒りを乗せる。

ご、ごめん。

居るとは思ってなくて。

「靴、脱いであつたと思うんですが」

……そういえば、あつたような気がしないでもないような……。

記憶を振り返ると、玄関の片隅に、小さな革靴が揃えてあつた、かも。

定かでないのは、それが『見慣れた物』であると、疲れた脳が無意識に判断したから、
だと思ふ。

「せっかく、気持ち良く昼寝してたのに……」

だからごめん、悪かったです……いや待った。

そもそも、どうやって入ったんだ？

「どうやってつて、これですけど」

未だに顔を隠す少女が、スカートのポケットから鍵らしき物を取り出す。小さくてよく見えないけれど、状況からしてこの家の合鍵に違いない。そんな物、自分は渡してないぞ。いつか渡すつもりではあったけどさ。

「だったら問題ないと思います。先に貰っても。

というか、無用心ですよ。あんな保管じや、誰でも盗めちゃうし。なので、わたしが先に預かっていたんです。むしろ感謝して欲しいです」

盗めるって言っちゃったよ、この子。

確かに引き出しへポイツと入れといたただけだったけど、盗んだ自覚はあるのね、一応。
「彼女」と知り合つて一ヶ月ほど。

最初は大人しい、ごく普通の少女だと思つていたが、それは見た目だけで、中身は意外と凶太いというか、なんというか……。

「それよりも」

呆れば良いのか、叱れば良いのか悩んでいると、
「彼女」はすつくとソファから立ち上がり、自分の真ん前に。

そして、顔を隠していたバッグを、胸に抱きかかえ。

「おかえりなさい。お仕事、疲れました?」

なんとも無愛想に、しかし非常に可愛らしく、小首を傾げた。

露わになったのは、間違いなく美少女と評して良い顔立ち。

これで誰にでも愛想が良かったら、アイドルデビュー待った無しの美少女である。
そんな子が「お帰り」を言ってくれる。

前の自分でも絶対になかったであろう、望外の幸運に戸惑いつつ、どうにか頷く。
あ、ああ。ただいま。……疲れたよ。本当に。

「ご飯、すぐ出来ますけど。食べますか」

えっ。マジで?

驚いて聞き返すと、「彼女」も「マジです」と頷いた。

鼻を働かせてみれば、確かに味噌汁の匂いがした。他にも下準備をしてあるのか、自信ありげだ。いやはや、有り難い。

それなら、後は風呂の用意をすませるだけか。

「ちなみに、お風呂も掃除してありますから。あとはスイッチを入れるだけです」

なんと。

思考を先読みでもしたかのように、「彼女」は胸を張る。

これでエプロンでも着けていたなら、完璧な奥様は女子○生である。

知っている人は居るだろうか。自分は知らない。なんとなくタイトルが思い浮かんだだけなのだ。

にしても。こんなに恵まれていると、後が怖いと思ってしまうのが、小市民の性な訳で。

一体、どういう風の吹き回し？ 「君」がそこまでしてくれるなんて。

「だって、家だと自分じゃ出来ませんし。」

セイバーもキャスターも、世話をしてくれるのは嬉しいんだけど、根が一般人なので、やっぱり時々、無性に家事がしたくなるんですよ」

「彼女」はあまり表情を動かさず、けれど、ほんの少しだけ眉を動かした。困っているようだ。

セイバー。キャスター。剣士、魔術師を意味する英語。

日常生活においては馴染みのない単語だが、これらは、「彼女」の連れ合いである二人の女性を指す言葉だった。

面識がある程度で、全くもって親しいなどとは言えない間柄なので、詳しい事は言えないのだが、そんなに甲斐甲斐しいのだろうか？

キャスターと呼ばれる青い女性は、まあそんな感じだったけど、セイバーと呼ばれる赤い少女の方は、どちらかと言えば世話される方的な雰囲気を感じたのに。

というか、家事をしたいのならそう言えば良いのでは？ 疑問が口について出る。でも、直接あの二人に言えば、家事くらい普通にさせてくれるんじゃないか？

「……言って聞くようだったら、どれだけ幸せか……」

あ。なんか地雷を踏んだっぼい。

呟いた「彼女」の表情は、目に見えて暗く落ち込んでしまった。

詳しい事情は知らないし、出来ることなら知りたくないが、子育てに疲れた新米ママみたいな顔をされては、流石に気まずい。

どうにかして話をそらさねば。

あー、えつと。ご、ご飯！ ご飯食べよう！ 作ってくれたんだらう？ もうお腹減りまくりだしさつ。

「……そう、ですね。うん。すぐ準備します」

ちよつとおどけて、大げさに空腹をアピールすると、こちらの意図を汲んでくれたのか、小さく笑ってくれる。その笑顔は堪らなく可愛らしい。

慣れた手付きで、セーラー服の上に純白のエプロンを重ねる姿は、まさしく対男宝具が如き威力だった。

抵抗できるのはきつと、赤い魔槍のボルク抜きな方々だけであろう。

……宝具とか赤い魔槍とかってなんだらう。知らんけど的確な表現だという自信はあった。

あ。でも、どうしよう。

これ、無駄になっちゃったな。

「どうかしました?」

適当に何か腹に入れようと思ってたから、コンビニでパン買って来ちゃったんだよ。
焼きそばパンなんだけど——

「わたしが食べます」

——え?

食い気味に、〃彼女〃はそう言い放った。

視線は、左手にぶら下げっ放しだったビニール袋へと。

「〃貴方〃はわたしが作ったご飯を食べる。わたしは〃貴方〃の買って来た焼きそばパンを食べる。これでなんの問題もありません。パーフェクトアンサーです」

いやそんな。某映画の副題っぽく言われても。

それほど長くない付き合っただけど、何度か外で食事を一緒に摂った時、*「彼女」*は決まってる焼きそばパンを買っていた。

だから今回、つい自分も焼きそばパンを買ってしまったのだが、ここまでとは。……まあ、*「君」*がそれで良いのなら、異論は無いけど。本当に良いの？

「はい、大変結構です。座って下さい。お味噌汁、温めますから」

鷹揚に頷いて、キッチンへ向かう *「彼女」*。

風呂を沸かすスイッチもあっちにあるから、ホント任せきりだ。

なんというか……。新婚生活を送っているんじゃないかと、勘違いしたくなる光景である。

普通に考えればあり得ないし、見た目的にもあり得ないのだが。

SE・RA・PHの守護者と、寄る辺のない漂流者。

高校生らしき *「彼女」*と、二十代から三十代らしき *「自分」*。

釣り合うはずがない。

そんな事を思ってしまうのだけれど、忙しそうに、スリッパをパタパタ鳴らす後ろ姿

をソファで眺めていると、確かな幸福感を覚えてしまつて、長続きしなかつた。

んく。肉の焼ける良い匂いもしてきた。これは味噌漬けだろうか？

難しい事を考えず、今は「彼女」の手料理を待つていよう。それが良い。

程なく食事の準備は整い、テーブルに着いた自分の前には、豪勢とは行かないまでも、暖かな食事が並んだ。

味噌漬けにした豚肉とキノコの炒め物。

大根と人参の味噌汁。

ほうれん草の胡麻和えに出汁巻き玉子。

そして白いご飯。

自然と頬がほころぶ、暖かな食卓だった。

「彼女」の前にそれがなく、焼きそばパンだけが置いてあるのが、微妙に違和感と罪悪感を覚えさせるけども。

「いただきます」

いただきます。

二人で手を合わせ、日々の食事に感謝を忘れて、自分は箸をとる。

まずはやつぱり、味噌汁から。

「美味しい、ですか？」

気になるのか、“彼女”がこちらを、上目遣いで覗き込む。

まるで子犬にも思える姿に、しかし自分はあるて間を作った。

固唾を呑むような音。それを聞き届けてから、素直な感想を告げる。

うん。美味しい。ホツとする味だよ。

「そうですか。……良かった」

ホツと一息つき、焼きそばパンを頬張る少女。

テーブルの下に隠された左腕が少し揺れたのは、恐らくガッツポーズでもしたからだろう。

なんだかおかしくて、自分はまた笑っていた。

誰もが舌鼓を打つ……なんていうレベルではないが、基礎をしつかり踏まえ、食べる人を想って作られた料理は、いとも簡単に心を和ませてくれる。

ちよつと柔らかくなつた味噌汁の大根とか最高だし、炒め物は水っぽくなく、ご飯が進む。

箸休めの胡麻和えだつて美味しいし、ちよつと型崩れした出汁巻き玉子も御愛嬌。

ああ、幸せだ……。

「お仕事、順調みたいですね」

うん。こき使われるけどね。

勉強する事ばかりで、仕事が楽しいと思つたのは初めてだよ。多分。

世間話や仕事の話を交えつつ、食事は進む。

自分の仕事は、ありていに言えば物流の管理である。

解放されたばかりらしいSE・RA・PHにも、この手の仕事は必要不可欠。

必要に応じて仕入れまでやらされるから、ブラックとホワイトの中間みたいな忙しさだけだ。

SE・RA・PHとはSERIAL PHANTASMの略称であり、霊子虚構世界の事……のようだ。

ムーンセル——地球の衛星である月の内部に発見されたという、人類ではない知性体

に起源を持つスーパーコンピューターが構築した、いわば仮想空間。

つまり、ここでこうして食事を摂っている自分も、目の前で焼きそばパンをモツシャモツシャしている“彼女”も。

地球に存在する生身の人間ではなく、月に居る電脳体なのだという。

他人事のように言っているのは、まるで実感が無いから。

だって、ここは現実と変わらない。

地球ではあり得ないことが起きるのも事実なのだけれど、それ以外は全く。

そうだと教えられなければ、自分はいつまでも、ここが地球のどこかだと思っていた事だろう。

己の名前すら、思い出せないまま。

「記憶の方は、どうですか。何か思い出せました？」

どこか、腫れ物に触るような口振りで、“彼女”が問い掛ける。

そう。自分には記憶が無い。

SE・RA・PHで目覚める以前の、地球においてのプロフィールを、思い出すことが出来ないのだ。

地球で生まれ、育ち、暮らしていたのは分かる。歴史だつてある程度は。

けれど、マクロからミクロに——国家の歴史という記録から、自分という一個人の記憶になった途端、空っぽになってしまふ。名前すらも。

仕事をする為に奈々篠^{ななしの}という仮名は貰つたが、それだつて「名無し」から取つただけの記号。

理由も経緯も忘れたまま、自分はここに居る。

目覚めたばかりの頃の不安を思い出し、知らず黙り込んでしまつた。

「……あの」

心苦しいのだろう。

綺麗に整えられた「彼女」の眉は、八時二十分の角度になる。

どこまで人が良いのか、この子は。

偶然出会つただけの、縁も所縁も無い男を気遣い、心を痛めてくれて。

大丈夫だよ。

「はい？」

なんとなく、そんな言葉を口にしていた。

命の恩人にも等しい少女に、暗い顔をして欲しくない。

できる事なら、笑っていて欲しい。

だから、自分は。

仕事が忙しいおかげで、昔の自分の事は気にならないし。

というか、気にしてる暇ないし。

それに……。

「それに？」

途切れた言葉の続きを求め、*“彼女”*が鸚鵡返しする。

……どうしよう。

滅多にない機会だし、ちよつとばかり臭いセリフを言ってみたかったのだが、恥ずかしくなってきた。

なんでもないと言えば、深く詮索しないだろう。話はここで終わり。

けど、それで良いのか？ 甘えてばかりの関係なんて、きつと長続きしない。

そうならない為にも、まずは一步を踏み出すんだ。

言つたれ、自分！

……つき、「君」が、居て、くれるし。

寂しいと思つた時は、「君」の事を思い出せば、すぐにそんなの吹っ飛ぶ。こう見えても精神的にタフになつたんだ。だから、自分は大丈夫なんです。

「……………だす？」

噛んだ。この大事な場面で、噛んだ。

大丈夫なんですよ、優しい守護者さん……と続けたかつたのに、噛んでしまった。どうせ噛むなら、舌を噛み切つて死んでしまいたい。

慣れない事なんてするんじゃないやなかつた！

「だす………っ。だす、つて………っ！ キリツとした顔で、大丈夫なんです……。ふ、くふふ………っ」

しばし目を丸くした後、「彼女」は手で口元を隠しつつ、耐え切れないといった風に、

テーブルへ額を押し当てた。

当然、肩は大きく震えている。

笑うんだつたら、いつそ腹を抱えて、指差しながら大笑いして貰えませんか。こちらら顔が熱くて仕方ないんですけども。

「はあ……。なんだか、今後一ヶ月分くらい笑った気がします」

——とまあ、こんなやり取りがあつて、しばらく。

食事をなんとか終え、その後片付けも済ませた自分たちは、ソファに並んで座っている。

正面には中古の薄型テレビ——実際には動画再生プログラムらしい——が置かれ、昼下がりの情報番組が流れているものの、主な話題は先ほどの出来事だ。

そりゃあ良う御座いましたねー。

格好付けようとしたつて、どうせあの程度が関の山なんだすよー。

「ふうつくー！ や、やめて……。謝る、あ、謝ります、から……。つ。腹筋が攣っちゃう……！」

どうやらツボにはまったようで、不貞腐れながらの「だす」言葉にも、大きな反応があった。

一緒に食器を洗っている最中も、唇を噛み締めて我慢していた。

「彼女」の笑顔は、それはもう可愛らしいの一言に尽きるし、笑って貰えた事自体は嬉しいのだが、どうにも素直に喜べない。

見栄を張るのは止めておけ、という啓示だったと考えて、受け入れるしかないか……。

「嬉しい、です」

ふと、「彼女」が呟く。

顔を向ければ、穏やかな微笑みがそこにある。

騒がしさが消え去り、思わず胸が高鳴るほどの、美しい笑みが。

「『貴方』の支えになれているなら、わたしは嬉しいです。本当に」

薄茶色の瞳は、こちらを真っ直ぐに見つめている。

誤魔化すこと無く。

飾ること無く。

あまりに眩しくて、眼を逸らさずには居られなかった。

見つめ返せない自分が、情けない。

どうして、「君」は。こんなに良くしてくれるんだ。

「……………」

自分は、ただの厄介者だ。

「君」に迷惑を掛けた事はあっても、助けになつた事はない。断言できる。

でも、「君」はこうして、見ず知らずの男を、支えてくれる。

「君」は、王様なのに。

「……………」

いつの間にか、自分は「彼女」に問い掛けていた。

甘えてばかりの関係なんて嫌だと、「彼女」から頼られる存在になりたいと、自分は

思っている。だが、それはあくまで、自分の勝手な願いに過ぎない。

本当はそんな資格、無いんじゃないのか。

“彼女”に甘える事なんて、本来なら許されず。

頼りたいなどという願いは、おこがましいのではないのか。

つい数ヶ月前まで、S.E. R.A. P.Hは違う形をしていたらしい。

魔術師ウィザードと呼ばれる、魂を電脳体へと変換できる才能を持つA級ハッカーのみがアクセスを許された世界。それがS.E. R.A. P.Hだった。

“彼女”はそこで行われたある戦いを勝ち抜き、最強である事を証明。世界を守るに足る存在として、S.E. R.A. P.Hを運営するだけの権限を与えられたという。

そして今、S.E. R.A. P.Hは全人類に向けて開かれ、新たなフロンティアとして開拓が進められている。

詳しい事情は知れないけれど、この認識で概ね正しいはず。

つまり、すぐ隣で佇むこの少女は、月の新世界を舞台とした物語の、主人公ともいえる存在なのだ。

強く抱きしめれば、簡単に折れてしまいそうな儂さを持ちながら、比類なき“力”を宿すヒロイン。最も新しい英雄。

そんな存在に、モブキャラではなく一個人として認識されているだけで、奇跡に等し

い。

手料理を食べ、冗談を言つて笑い合うとか、夢物語にしても出来過ぎだ。これ以上を望むだなんて、罰当たりにも程があるのでは？

小市民らしい後ろ向きな考えが、心に色濃い影を落とす始めている。

モブならモブらしく、分相応な小さい幸せを噛み締めていれば良いのだ、と。

しかし――

「『貴方』を見てみると、実感できるんです」

それでも『君』の眼は、尚も輝きを増して、見つめてくれて。

何を？ と重ねて問えば、『彼女』は自らの胸に手を置き、柔らかく微笑む。

「日常を。わたしの根っこを」

わずかに細められた眼が、今度は自分ではなく、遠くを見つめた。

それは多分、『彼女』が過ごした日々。

二騎の英^{サトウアキト}霊と共に駆け抜けた、戦いの記憶。

死してなお、輝かしく／呪われながら、人類史に刻まれる英雄達との物語。

「わたしは、この世界——月で、色々な経験をしました。

聖杯戦争。遊星との戦い。他にも沢山あった気がするけれど、まあ、それはさて置き。事情を知ってる人の中には、わたしを妙に持ち上げる人も居る。

……でも。それでも、わたしは唯の人間だから。

“貴方”と居ると、魔術師として目覚める前の……。

聖杯戦争の勝利者でもなく、ムーンセルの王権代行者でもない、普通のわたしに戻れる。

ホツとするんです。落ち着きます。安心、します」

言葉が重ねられる度に、“彼女”と自分の距離は縮まっていく。

心理的な距離と物理的な距離の、両方が。

手を伸ばしてもギリギリ届かない距離から、指を絡められる距離。やがて、意図せずとも肩が擦れる距離へ。

小さな手が、こちらの太腿に乗せられた。

聞こえてしまうのではないかと錯覚するほど、心臓は大きく脈打っている。

ここまでされて理解できないような、鈍い男ではない。遠慮がちに伏せられた顔から。

微かに上気して見える頬から。

太腿に伝わる体温と震えから、その想いは読み取れた。

ところが、この土壇場で自分は怖じ気づく。

情けない事に、「彼女」の手に触れようとした瞬間、「彼女」に付属するお邪魔虫――

――もとい、付き従うサーヴァント達を、思い出したのだ。

性別なんて御構い無しに、「彼女」への愛を叫びまくっている二人の姿を。

あの二人……。せ、セイバーさんとか、キャスターさんは？

えっと、その……。

「……言いたい事は、分かります。

セイバーもキャスターも、わたしにとって大切な存在です。

代わりなんて居ない。わたしだけの、最高の仲間達」

言葉足らずになってしまいう自分にも、真摯に答えてくれる「彼女」。

儂げな少女としての一面でなく、不屈の魔術師としての一面でもって、揺るぎない信

頼と親愛が語られた。

しかし、「彼女」は「でも」と続け……。

「二人の気持ちは嬉しいけど、わたし、同性愛者じゃないので。……いい加減、愛が重くて……」

あゝ……。

虚数空間地獄の最下層の底にまで届くんじやないかという、深い溜め息をついたのだった。

「彼女」の従者であるはずの二人。自分の知る限りでも、その愛情表現は激しかった。

片方は無邪気に美しいものを愛し、もう片方は有邪氣うじゃき（造語）に手段を選ばず。

例え、どれほど美しく整った容姿を持ち、尊敬に値する人物であったとしても（狐を除く）、同性を愛するというのは難しいだろう。普通は。

流石に苦勞が偲ばれて、自分は「彼女」を励まそうと肩を叩く。

……大変、だよ。自分には想像するしかないけど、その、なんだ。

少しでも楽になるなら、いつでもこの部屋に来て良いから。話し相手にもなるし。

だから、元氣出して？

「ありがとう……。本当に、ありがとうございます……」

涙ぐんでいた「彼女」は、まるで縋りつくように、こちらへと体重を預けてくる。

結果、腕の中で抱き留める形となってしまう、内心大いに慌てたが、突き放すなんて勿体なゲフンゲフン可哀想だ。

気分が落ち着くまで、と己に言い聞かせ、グズる子供相手にそうするみたく、頭をポンポンと。

甘い香り。シャンプーだろうか。良い匂いだった。

というか、計らずも頼りにして貰うという願いが叶ってしまった訳ですけど、釈然としないのはどうですか。教えてデメキン先生。

なんて冗談は捨て置き……。

あの、さ。

「なんですか」

もうそろそろ、離れませんか？

くつつき過ぎだと、思うのですが。

すっかり落ち着いた様子の「彼女」に向け、自分は断腸の思いでそう告げる。おデコを肩へ擦りつけないで頂きたい。

太腿へ乗せたままの手をモゾモゾさせないで頂きたい。

我慢するのにも限界があるのですよ。

「嫌、ですか」

……限界が、あるというのに。

寂しそうな声は、抗い難い魔力で理性を絡め取ろうとする。

嫌じゃない。嫌な訳ない。嫌とか言うヤツ居るはずがない。

許されるならば、思いつきり抱き締めたい。

細い体を抱き上げ、そのままベッドでゴールインしたい。

けど駄目だ。

いくら S E . R A . P H に警察機構が無くても、青少年保護育成条例が無かろうとも。

守らなければならない一線というものは、この胸の倫理観に刻み込まれているのだか

ら！

という訳で早急に、可及的速やかに、物理接触を断ち切——

「これでも……。勇気を出してるん、です、けど……」

上目遣いの瞳が、潤み始める。

瑞々しい唇は薄く開かれ、震えた吐息を首筋で感じる。

——プツン、と。

確かに、断ち切られる音がした。

何が切れた？ 恐らく、理性の糸だろう。

顎に手を添える。

あ、と漏れる声。

薄茶色の瞳が、瞼に隠された。

わずかに上を向く“彼女”の顔。

ゆつくりと、しかし確実に距離は縮まり。

そして。

「そうは問屋があああっ！」

「大雪山降ろしで御座いまあああすっ！」

「おじやま、しまあす」

ドンガラガツシャーン！

という古典的な効果音を伴い、赤と青と白。三人の少女が窓から飛び込んで来た。

砕け散ったガラスはかなりの勢いで、「彼女」がとつさに障壁を張ってくれなければ、大怪我をしていたかも知れない。部屋は手遅れだけど。

ああ。さような敷金。こんにちは不動産情報誌。

ところで、敷金礼金という悪習慣がS.E. R.A. P.H.にも残っているのは何故なのか。どうせなら無くなって欲しかったです。

あと、大雪山降ろしだと降ろしちやってるから。漢字も違うし。

「セイバーにキャスター!? どうして、レガリアで痕跡は消してたはずなのに！ オマケにアルテラまでっ」

「ふ。甘い奏者よ。余は薔薇の皇帝なのだぞ？ そのような安易な妨害工作、通用するはずがないであろう！」

「具体的に言うくと、物理的な痕跡を追わせて頂きました。

流石は御主人様。霊子的ヒドウンは完璧になされていましたが、ほら。わたくし私狐ですし。

なんだかんだと言われておりますけれども、本来はイヌ科。匂いを追跡なんてお手の物なんですよ？

まだまだですわーオホホのホー

「わたしは、面白そうなので着いてきました。こんにちは、ナナシさん」

う、うん。こんにちは、アルテラちゃん……。

驚愕するセーラー服少女と、胸を張る金髪の赤い少女、ツインテ淫乱ピンク狐巫女という属性盛り過ぎな青い女性（ここ重要）が睨み合う中、自分は残る白い幼子と挨拶を交わす。

相変わらず「の」が抜けてるけど。

赤い少女——きつと長いのであろう金髪をシニヨンにした碧眼の子が、セイバー。

本名……じゃなくて真名は、ネロ・クラウディウス・カエサル……なんたらかんたらゲルマニクス？ かの暴君ネロその人だとか。女の子だけど。

青い女性——先ほど挙げた特徴に狐耳と尻尾を付け加えたのが、キャスター。

真名、玉藻の前。金毛九尾白面の者とか、その他色々な呼び名を持つ大妖怪？　だそうなのだが、どこまで本当なのか。

最後の白い幼子——褐色の肌と紅玉の瞳、純白の髪を持つ、やたらめつたら露出度の高い子が、アルテラちゃん。

真名もアルテラというらしいのだが、詳しい事は知らない。彼女自身も知らないっぽい。サーヴァントの区分で言うときセイバーのようだ。

サーヴァントは、主に七つのクラスで分けられる。

セイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、キャスター、アサシン、バースカー、
 剣兵、槍兵、弓兵、騎兵、魔術師、暗殺者、狂戦士。

中でもセイバー、ランサー、アーチャーが……あれ？　アーチャーじゃなくてライダーだっけ？　とにかく、その三騎士クラスが当たりのサーヴァントで、一番ハズレはキャスターなのとか。

もつとも、この区分け——弱点に繋がる真名隠しは、聖杯戦争において必要とされたものであり、今現在S.E. R.A. P.Hに存在するソロサーヴァント達の中には、あつさり真名をバラす人も居ると聞いた。

自分が彼女達の真名を知っているのは、単にそう呼び合うのを聞いた事があるだけで、真名で呼ぶ事はアルテラちゃんにしか許されていない。

ちなみにそのアルテラちゃん、ガラスの破片を「『じゅうりん』だー」とか言いなが

ら、ササーつと掃除してくれてる。

見た目一桁代なのに、なんてしつかりした子なんだろう。

爪の垢でも煎じて飲みたい飲ませたい。

「奏者！ これは一体どういうことなのだ!？」

余というものがありながら、真昼間に他所の男と浮気するとは！

まるで昼ドラのヒロインになったかのようなではないか！ ちよつとだけwktkするぞー！」

「全くで御座います！ いえ私はwktkなんてしません。

しかも、このようなモブ男もといダス男をお選びになるだなんて！

一本しかない堪忍袋の尾が切れました。御主人様どいて？ そいつ殺せない」

現実逃避している間にも、状況は刻々と変化している模様だ。

セイバーさんがスカートを翻して熱弁し、追隨するキャスターさんはいえ、どこに持っていたのだろう、こちらに包丁を向けてヤンデレる。

見てたんですか。見てたんですね狐巫女さん。恥ずかしくて刺殺される前に悶死しそうです。

そんな自分を背中に庇い、*「彼女」*はジェラシーサーヴァントの前に立ち塞がってくれている。

「前から口を酸っぱくして言ってるけど、わたしの恋愛対象は異性なの。いくら二人でも、恋愛事情にまで口を出されたくありません。それに浮気じゃないし」

「あ。わたし、知ってます！ 不倫は文化、なんですよね？ 昔の*「きよくとうちいき」*の、ニュース映像で見ました！」

「アルテラよ。余は前に、文明に良い悪いなど無いと言ったが、文化については別である！ それは悪い文化だ！

特につ、余と奏者の間に限っては、*「この世全ての悪」*並みに極悪な文化なのだつ！
そう覚えるが良い！」

「生前から放蕩しまくってたセイバーさんが言ってる良い事とは思えませんけど、この場においては全くもって同意見。大人しくお口チャックするタマモちゃんなのでした。まる」

「彼女」の言い分を、アルテラちゃんは無邪気な笑顔で混ぜ返す。

うんぬん……。こればかりはセイバーさんに賛同せざるを得ない。

浮気は確かに駄目だ。密会スキルを最大まで上げても1%の確率で刺されるし。

しかしである。浮気という事象には恋人関係であるという前提が絶対条件であつて、この場合は「彼女」が言つた通り、不適切な表現だろう。

全く黙っていない狐巫女さん？ 無視します。

「そう……。二人共、どうあつても邪魔するんだ……」

話を通じないというか、マイペースを崩さないというか。

暖簾に腕押し、糠に釘を地で行く二人の言葉を聞き、「彼女」は俯く。

落胆したみたく肩が落ち、しかし、異様なまでに迫力は増して。

どう声を掛けたものかと悩む自分だったが、答えが出る前に、「彼女」の左手の薬指に嵌められた指輪が、キラリと輝いた。

「ぬっ!?! こ、これは!」

「みこんっ! レガリアの拘束術式で御座いますか!?!」

瞬間、二人のサーヴァントは、光の糸で雁字搦めにされてしまった。

全身をくまなく覆われ、天井から吊るされるその姿は、まさしく蓑虫である。キャスターさんの読み通り、「彼女」がコードキャストを行使したのだろう。

これが、地球では絶対にあり得ない現象の一つ。

プログラム 簡易術式へと魔力を割り当て、様々な効果を発揮させる。いわば、リソース 電脳空間でのみ使える魔術。魔法とは違うのだそうだ。

蓑虫状態になっているセイバーさん達も、存在そのものが地上ではあり得ないんだけど、最近あまり気にならなくなってきた。慣れつつ凄い。

「そこで見てください。わたしが、どれだけ本気なのかを」

吐き捨てるように宣言した「彼女」が、傍観者と化していた自分へ向き直る。

その眼力の強さに、ついソファから腰を上げ、後退ってしまう。

ありていに言う……食われそうで怖かった。

な、なあ。ちよつと落ち着かないか、「君」？ 冷静に話し合いを……。

「問答無用。覚悟完了。我即行動。術式発動・空気投げ」

なんかほぼ漢字で言っていない!? あ、ちょ!?

我ながら冴えたツツコミも虚しく、いきなり自分の体は天地を入れ替えた。

グルンと一回転し、仰向けに落着したのは、カーペットの上。地味に背中を打って痛い。

アルテラちゃんが掃除してなかったら、一体どうなっていた事か。グツジョブ、褐色ロリ家政婦さん。後で金平糖あげるからね。

とか考えているうちに、衝撃で麻痺スタンした自分の腹の上へと、心地良い重さを感じた。

“彼女”が、馬乗りになっている。

「で、では、行きます……!」

ややあって、茹でダコの如く真っ赤な顔が、段々と近づいて来た。

落ちる髪に、こちらの顔がくすぐられる。

ヤバイ。“彼女”、本気だ……!

駄目だ。そそ、それは、駄目だつて。

あ、アルテラちゃんが見てるし! 情操教育に悪いし!

いや、二人つきりならむしろ望むところなんだけど!?

「わあ……！ み、見てない、ですよ？ わたしは、見てません。バツチリ、眼を覆つてます、から。……うわあ……！」

うん見てるよね！

間違いなく指の隙間からガン見してるよね！

綺麗な赤い瞳とパーペキ眼が合ってるしさあ！

「動かないで下さい。わたしを見て。……今は。わたし、だけを」

頬に手を添えられ、顔の向きを強引に戻される。

視界は、文字通り「彼女」で一杯だった。

まっげの本数だつて数えられるし、「彼女」の瞳に映る自分自身すら、確認できる。

急激に世界が狭まっていくような、奇妙な感覚があつた。

外野の存在を、無視できるようになっていく。

「待て、待つのだ奏者よ！ 余が悪かつた。余に至らぬ点があつたのなら直す！ だか

ら待つのだ奏者よおおっ！」

「うっそ何これ、マジ固い術式なんですけどお!? あ、でもでも、御主人様に緊縛されていると思えばハートの奥がキュンキュンと……とか言ってるうちにMマシキスする5秒前K 5じゃないですかーやだー！」

みよいん、みよいん、と。

どこかで光る蓑虫達が、飛び跳ねている気がするけれど。

褐色ロリ家政婦は見た的に、アルテラちゃんに見つめられている気もするけれど。

とりあえず、頭の片隅へ放り投げておこう。

「彼女」という存在を、全身全霊で受け止めるために。

そして、今度こそ。

「あああつ、奏者が、奏者の唇が奪われるー！ 余だつてまだ一度もした事ないのにー！」

「なるほど、NTR。そういうのも……いやいや無えですからー!? ぎゃー止めてー!?」
「わああ……。これが、ちゅー。きす。べーぜ。愛の、文化……」

三者三様の阿鼻叫喚の中、唇が重なった。

自分の覚えている限り、初めてであるはずの口付けは。

——焼きそば。パンの、味がした。

第二話

気がついた時にはもう、*“それ”*に没頭していた。

頭上から直角に陽光が降り注ぐ中、膝をつき、平たい石を両手で持つて、地面を掘り返す。

傍らに、小さな首輪があった。

小型犬か猫につけるサイズ。小さな鈴が付いているから、猫の物だろうか。よく分からない。

フワフワと、ユラユラと。

ぬるま湯を漂っているような思考は、ある種の酩酊にも似ていた。

そう、酔っている。

途方もない／ほんの些細な■■に酔いしれ、前後不覚のまま。

自分は、穴を掘り続ける。

「あの……」

背後から声を掛けられた。

鈴を転がすような、清涼感を与える少女の声。

振り返ると、果たして予想通り、少女が立っていた。

毛先が緩くウェーブした、長い髪の少女。

真っ白なワンピースを着ていて、腰には大きな赤いリボン。

同じく赤色のチョーカーと、ブレスレットを左手首に着けている。

よく見れば、左手の薬指には指輪が光っていた。

女子高生くらいなのに、まさか人妻なのだろうか。相手の男が羨ましい。

そんな事を一瞬思って、なんですか、と返事をする。

自分の喉から発せられたとは信じられないほど、冷たい声で。

「……………」

萎縮してしまったのか、少女は何も返さない。

怖がらせてしまった。

罪悪感と、申し訳なきが込み上げてくるけれど、浮ついた思考は、それを無視してしまおう。

ようは、作業に戻る事を選んだのだ。

少女を居ないものとし、穴を掘る。

無心に。

手の痛みも、汚れも厭わず。

そうする事でしか己を証明できない、単純な機械のように。

「……あの」

いつの間にか、少女が隣に座り込んでいた。

チラリと視線を動かし、また地面へ落とす。

放つておいて欲しかった。

何故だか分からないけれど、無性に“人間”が鬱陶しかった。

だから、ただ穴を掘り続ける。

掘り続ける事以外に、何もしたくなかった。

なのに、“君”は――

「早く、起きて下さい。仕事に遅れますよ」

——ぬあんですと？

優しく揺すぶられる感覚で、ようやく、自分が天井を見上げている事に気づいた。

知らない天井だ。いや本当に。というか天蓋？

うちのベッドには、こんなゴージャスな天蓋なんて付いてないし。

夢？ 随分と懐かしい夢を見たな……。

というか、やけに煌びやかな家具の目立つここは、何処だろう。

さっきの声は「彼女」のだったけど、あれも夢だったのだろうか。

だったら惜しい事をした。

朝、好きな女の子に優しく起こしてもらえるなんて、そんなの男の夢に他ならな——

「もう。早く起きてくれないと、ほっぺ、つねりますよ」

——あれ。

夢の存在だったはずの子が、夢と同じワンピースを着て、こちらを呆れ顔で見下ろしている。

……え？ お、はよう？

ん、あ、んん？　なんで「君」が……。

「まだ寝ぼけてるんですか？　ここは、ローマ領域にあるわたしの家ですよ。」

「貴方」の部屋……というかアパートは昨日、エリザベートが更地にしちゃったじゃないですか」

……ああ。そう言えばそうでした。思い出したくなかった……。

むくり。体を豪華なベッドから起こしつつ、昨日の出来事を振り返る。

「彼女」に押し倒されて……き、キスをしたまでは良かった。うん、良かった。

無我夢中で、何度も何度も、ただ唇をついばみ合うだけの、拙い行為ではあつたけれど、もう昇天しそうでした。

濃密なキスシーンに当てられたのか、セイバーさんもキャスターさんも、真つ白に燃え尽きてムンクの叫びみたくなっていた。自分が彼女達の立場だったら、きつと同じ風

になっていたと思う。

ちなみにアルテラちゃんは、とても満足そうに、お肌をツヤツヤテカテカさせていました。君の将来が心配です。

とまあ、ここまでなら笑い話で終えられた……かも知れないのだが、むしろここからが本番だった。

ご臨終された窓枠のフレームを潜り抜け、第四の侵入者が「やつほー」と現れたのである。

鮮血のような赤い髪。ねじくれた角。爬虫類を思わせる尻尾と、皮膚の翼を持つ彼女の名は、エリザベート・バートリー。

数百の少女の生き血を浴びたとされる、極悪非道な、あのエリザベート・バートリーなのだという。にわかには信じ難いのだが。

いつもの露出度高めな格好をしたバートリーさんは、優雅に部屋へと降り立つと、勝気な瞳を光らせ。

『なんだか心地の良いセイバーとキャスターの悲鳴が聞こえたから、寄ってあげたわよ？ 子リス。』

でも、貴方の家ってこんなとこにあったかしら……ん？ さつきからうづくまつて何

を……し……くあwせd r f t g y ふじこーp!？」

——たかと思いきや、すぐさま声にならない悲鳴をあげ、腰を抜かした。

横目に純白の布地が見えていたのは秘密だ。

しかし、バートリーさんの登場で正気に戻された自分と違い、「彼女」は……行為に夢中で。結果として無視する形に。

自分としても中断し難く、されるがままになってしまったのが、良くなかった。

『……駄目よ。駄目。駄目、だめ、ダメッ！ そんなの、許さない……。許さないん、だから……。』

私を置いて、子リスだけ先に大人になるなんて。絶対に、許さないんだからあああああっ!!!』

次の瞬間、バートリーさんは禍々しい紋様を身に纏う。

悲痛な叫びにも聞こえるが、実態は清々しいほど自分勝手な、怒りの咆哮。

それは物理的な衝撃波となり、燃え尽きていた二騎のサーヴァントの、防衛本能を励起した。

つまり、マスターである“彼女”を守ろうと、戦闘モードになっちゃったのである。

『な、何事だ!? 何やら、奏者の唇が奪われる幻を見ていたような気がするのだが、なぜにエリザベートがおるのだ!?』

『奇遇ですねえセイバーさん。私も不愉快な白昼夢を見ていたようなのですが、とりあえず、今はあの元小間使いをどうにかしましょう。あれ、マジで暴走しかかっています。』

というか、あの戦いの時にも思いましたけど、しばらく見ない内に何があつたんですか? 妙に魔力が高まっているというか、露出度が減つたと言いますか……』

『ふむ、確かに。我がライバルよ! イメチェンは時に良い刺激になるが、その柄は少し禍々しい雰囲気があるぞ? なんなら、余が新しいコスチュームをデザインしても良いのだぞ!』

『うわあああんっ! どうせアタシなんてそんな扱いよおおっ! もつとちゃんとした出番さえあればああああああつ!!!』

蓑虫状態から脱したセイバーさん達が、バートリーさんとの間に立ちふさがる。

噛み合っているようで、全く別の方向へとすれ違う会話。

なおかつ、意味不明な切実さを宿した絶叫が、アパートにヒビを入れていった。

その後を語ると長くなるので簡条書きにすると、以下のようになる。

1 流石に正気へと戻った「彼女」が、困惑するアパートの住人達を、レガリア——例の指輪の機能で丸ごと避難。

2 セイバーさん&キャスターさん VS バートリーさんのマジバトル開始。アパートが瓦礫の山へと変貌する。

3 意外にもバートリーさん善戦。追い詰められるセイバーさん達。

4 二人を助けようとアルテラちゃんが参戦し、「ていあいどろつぷ、ふおとんれい！」。空から光の柱が落ち、アパートのあった場所が更地と化す。バートリーさんも黒焦げに。

5 事が終わった後、家を失った人達から賠償を求められ、失った資産価値の十倍のリソースを支払うことで決着がついた。もちろんバートリーさんが。

払う当てが無い彼女は、仕方なく千年京で野良小間使いへとジョブチェンジしたらしい。返済の目処は百年後だそう。

それでもって、住む場所を丸ごと失ってしまった自分は、「彼女」の「うちに来ませんか」という申し出を受け、半同棲生活がスタートしたのだ。

あれ？ 更地にしたのバートリーさんじゃなくて、セイバーさんやアルテラちゃんじゃ？

……まあいいか。元凶みたいなものだし、責任の一端があるのは間違いないんだから。

「目は覚めましたか。なら、顔を洗ってきて下さい。案内しますから。お仕事、本当に遅れちゃいますよ」

はい。

少しだけ大人びた……というより、背伸びしたような物言いの「彼女」に促され、ベッドから降りる。

ちなみに、寝間着は緑色のジャージだ。着の身着のままアパートから脱出したため、「彼女」が用意してくれた物である。

見た目はともかく、着心地は素晴らしく良かった。ステータスがアップでもしていない。うだ。

目の前をトコトコ歩く背中に続き、妙に豪華な洋風建築の廊下を、洗面所へ。

これまた妙に豪華な洗面所の中で顔を洗い、トイレを済ませる。

電脳体に排泄が必要なかと問われれば、それはYesである。

具体的に説明すると、電脳体は眠っている間に自らのデフラグを行うのだが、その際

に出た不要な断片クラスタを消去する……という行為を、排泄として行っているのだそうだ。

自分としては全く意識せず、普通に出しているだけだけでも。

ちよつと汚い話はさて置き。

サツパリした自分は、待つてくれている「彼女」にまた案内され、とある部屋に入る。大仰な木製のドアを開けた先に、なんとも意外な、一般家庭のリビングが存在していた。

誰もが簡単に思い描けるであろう内装は、「セイバー」の趣味も素敵だけど、やっぱり落ち着かないから」と、「彼女」が設計したのだとか。心の底から同意します。

そして、木目調のテーブルに、自分を出迎えてくれる白い幼子が一人。背の高い椅子に座り、脚をプラプラさせていた。アルテラちゃんだ。

「あ、ナナシさん。おはようございます。よく眠れましたか？」

うん、グツスリね。おはよう、アルテラちゃん。

にこやかに挨拶を交わし、斜向かいへと腰掛けた。

正面に座るとなんとなく居心地悪いし、遠慮なく隣へ行けるほど親しい訳でもないの

で、これが適切な距離だと思われる。

こんな事を気にしてるの、自分だけだろうけど。

「今から朝ご飯作りますけど、和風と洋風、どっちにします？」

「はい、マスター！ わたしは洋風がいいです！ “はんじゆく” のめだま焼きは、良い文明だと思います！」

アルテラちゃんが元気良く右手を上げ、紺色のエプロンを着けた“彼女”に返事を。ただ住居を提供してくれるだけでなく、こうして食事まで用意してくれるとか、本当に至れりつくせりだ。

とはいえ、何もせずに座っていられるほど、小市民は凶太くないのでして。

じゃあ、自分も洋風で。何か手伝うよ。

「だったら、トースト用のお皿を出しておいて貰えますか。戸棚に入ってますから」

了解です。

小さく微笑み、冷蔵庫の扉を開ける“彼女”。

自分も自然と微笑み返し、分かり易く整理整頓された戸棚へ向かう。

指示された皿はすぐ見つかったのだが、あまりに平穩過ぎて、おかしな不安を感じてしまった。

それと言うのも、本来ならば居るはずの二人——セイバーさんとキャスターさんが見当たらないからである。

特にセイバーさんなんか、自分と「彼女」が一つ屋根の下に住むと聞いて、これでもかと猛反対したのに。まさか、闇討ちしようと思われてるとか？

うん……。セイバーさんに限って騙し討ちはなさそうだけど、奸計謀略なんでもありのもう片方が心配だし、一応、確かめておくか。

ところで、アルテラちゃん。あの二人の姿が見えないんだけど……。

「ネロとタマモ、ですか？ 二人は、〝しゅっちよう〟してますよ？」

席に戻りつつ、出張？ と首を傾げれば、アルテラちゃんは「はい」と頷いた。

なんでも、先日の責任をバートリーさんだけに負わせるのは忍びないと、「彼女」がセイバーさん達に頼んで、新規拡張領域の財余剰リソース宝を入手してもらっているのだとか。

セイバーさんは、ローマ領域の端っこに確認されたという、尻尾が蛇の珍しいライオ

ンの素材^{マテリアル}を。

キヤスターさんは、千年京の隣に現れた中国っぽい領域に生る、竹の実を。

前者は多分ライオンじゃなく、後者に至っては、数十年から百年近く待たなければならなかったと思うのだが、どうなんだろうか。

ふおとんれい！ しちやったアルテラちゃんは何もしないで良いのか？

まだ小さな子が仲間を助けようとした結果、力加減を間違えてあなつちやつたんだから、責めるのは酷だと思えます。可愛い無罪。

しかし、二人が外出するということは、自分と「彼女」が二人きりになるという事。当然、セイバーさん達は渋ったようだ。

が、ここで取っておきの秘策が登場する。その名も——愛妻弁当。

ぶつちやけ、「彼女」が手作りしただけの、ごく普通の弁当らしいのだが、よく考えてみて欲しい。

想いを寄せる女の子が、わざわざ早起きして作ってくれた、お弁当。

これに抗える存在など居るだろうか。いや居ない。

思わず反語を使ってしまうほど羨ましかった。

まあ、これから「彼女」お手製の朝食を食べられるのだから、痛み分けと思おう。

「はい。朝ご飯、出来ました」

コトン、と目の前に置かれる、ベーコンエッグの乗った皿と、二枚のトーストが乗った皿。

他にも、バターやらジャムやらサラダやら。いつのまにか、朝食の準備は整っていた。いけない。すっかりアルテラちゃんと話し込んで、任せっきりに。

……けど、なんというか。

エプロンを着けて、忙しそうに動き回る「彼女」の姿が、とても。

料理するためにだろう、おろしていた髪をポニーテールに纏めているのが、とっても良い……。

「……？　どうか、しましたか」

っ！　い、いいえ、なんでもありません。

不思議そうな顔の「彼女」に、自分は慌てて首を振る。

しまった……。脈絡もなく、うっかり素直な感想を呟いてしまった。

むしろ、許されるなら即プロポーズしたい位に好きなのだが、空気の読めない男は

きつと嫌われる。誤魔化しておこう。

その後、アルテラちゃんの隣——自分の正面に「彼女」が腰掛け、「頂きます」の合図で朝食が始まる。

ふんわりサクサクなトースト。

半熟の目玉焼きに、香ばしく焼けたベーコン、サラダはコールスローだ。

定番かつシンプルなながら、美味しくないはずがない鉄板メニュー。自分も、アルテラちゃんも、もちろん美味しく頂く。

ああ、幸せだ……。

可愛い女の子と一緒に、その手料理を食べるだなんて。なんというリア充生活だろう。

自分は前世で、よっぽど徳を積んだに違いない。

生まれ変わってる時点で徳が足りてないような気もするけど。

「あの。一つ、質問しても？」

ふと、「彼女」が手を止めて質問を投げかけた。

なんだい？ と返すと、ほんの少し間を置いて、「彼女」は続ける。

「貴方は普段、お昼ご飯はどうしてるんですか」

お昼ご飯、かあ。

今朝の話の続きになるが、電腦体における食事というのは、意外にも生身の肉体の時と同じ意味を持つ。

情報資源リソースを使い、自らの体を維持するためのシステム保全やドライバー更新する事が、生身における食事と同義なのである。

実際には、食事という形でなくとも電腦体は維持できるらしいけど、人間としてのメンテナンスンタリテイを持つ者にとっては、やはり食事を真似てリソースを得る事が、最も効率が良いのだとか。

そんな訳で、S E、R A、P Hにも普通に食材は売っているし、レストランやスーパーだつてあるのだ。

ところが、もっぱら自分の利用する場所と言えば……。

普通に外食、かなあ。忙しい時はコンビニ弁当で済ませちゃうし。

自炊できれば良いんだろうけど、男のやもめ暮らしじゃねえ。

「そう、ですか。……え、つと。ですわね」

自墮落と思われても仕方ない実情に、しかし「彼女」は、なぜか安堵したかのような表情を見せる。

かと思えば、わずかに頬を赤らめて、恥ずかしそうにモジモジ。

相変わらず可愛いなあ。とか思いつつ言葉の先を待っていると、意を決したのか、両手を前へ差し出す「彼女」。

何も乗せられていない手の平に、小さな光。

次の瞬間、そこには大きめな弁当箱が出現していた。

「お弁当、作ってみました。……ご迷惑じゃなければ、その……。受け取って、もらえますか」

天使か。天使だ。天使が居る。

ワンピースの上からエプロン着けた、ポニーテールの愛らしい天使が、照れ臭さを無表情に隠し、手作り弁当を差し出していた。

もしかしてこれ、何かのフラグなんじゃないだろうか。

受け取ったが最後、分不相応な幸運のツケで、非業の死を遂げるんじゃないかなるか自分。

そんな考えが頭をよぎったけれど、脳内に提示された選択肢は、

○ありがたく受け取る

○受け取るに決まってる

○受け取らないはずがない

の三つ。選択の余地がなかった。

というか、どれを選ぶか以前に、自分はもう立ち上がり、弁当箱を受け取っていたりする。

我ながら欲望に忠実だ。

迷惑だなんてとんでもない、嬉しいよっ。

セイバーさん達のついででも、「君」に弁当を作ってもらえるなんてさ。お昼が楽しみだ！

「………違います」

へ？

「どちらかと言えば、セイバー達の方が、ついでなんです。

……ほ、本命は、〃貴方〃の……です。

二人に用事を頼んだのも、その……。邪魔されないうえ、ですし」

さ、左様です……か。

「左様で、御座います」

リビングに、気恥ずかしい沈黙が広がった。

顔が熱い。

火で炙られているようだ。

〃彼女〃も俯き加減に、朱の差した頬を隠している。

というか積極的過ぎませんか？

もう、セイバーさんの言う情熱の奏者じゃないはずなのに。

……いや。よく考えたら、元々は〃彼女〃の一部。こんな風に表に出ても不思議ではない。

不思議ではないんだけど、意中の相手からガシガシ攻略されるなんて、きつと産まれて初めてだろうから、反応に困るっ。

「マスターとナナシさん、ラブラブ？」

「う。……えー、あー、その……」

唐突な幼女の横槍に、「彼女」と自分は何も返せない。

おそらく、間違いじゃないだろう。

まだお互いに、ハッキリと好意を伝えてはいないけど、キスだってしたし、お弁当まで作ってくれたし。

むしろ、これで好かれてなかったとしたら人間不信になります。

でも。だがしかし。

まだ認める事の恥ずかしさが勝った自分は、ワザとらしく壁の時計を確認。大声を上げた。

あ、あつ！ もうこんな時間だー！ 早く仕事に行かないとー！

「ほ、本当ですね。急がないと、遅れてしまいます」

焦ったふりで席を立つと、「彼女」もそれに続いてくれる。

アルテラちゃんは不思議そうな顔をしていたが、どうにか誤魔化す事には成功したよう
うで、自分達は出勤の準備に取り掛かった。

といつても、「彼女」に貰った携帯端末でシステムコマンドを呼び出し、ジャージか
らスーツへと装備変更するだけなのだ。

まるでゲームみたいだけれど、これがS.E. R.A. P.H.での一般的な行動である。

魔術師でも、月で産まれたAIでもない、ただの人間である自分では、こうして専用
の端末を用意して貰わないと、そもそもシステムコマンドすら呼び出せない。地味に不
便だ。

ともあれ、働く大人の戦闘服を身に纏った自分は、リビングからドア一枚を隔てた玄
関へ向かう。

リビングと同じく、ごく一般的な玄関は、ドアそのものがポータルとして機能してい
るらしい。つまり、仕事場の近くまでひとつ飛び。

うちのドアにもこんな機能が欲しかった。

「忘れ物、ありませんか？」

物理的な行動として革靴を履きつつ、バッグと、その中に入れた弁当箱を確認。他に仕事場へ持つていく物は、筆記用具とか名刺とか、よくあるサラリーマンの必需品くらい。

忘れ物はないと判断し、新妻の如く見送ってくれる「彼女」を振り返る。

うん、大丈夫だと思う。それじゃ、行つてきま——

「……わ、忘れ物、ありませんか？」

ガツシ。

再び玄関口へ向かおうとした自分の腕が、引き止められた。

うん？ と今一度振り返れば、ジャケットの袖をつまむ「彼女」が。ど、どうかした？

「忘れ物、ありますよねっ」

え。確定ですか。

ちよつと強気に言い切られ、なんだか自信が無くなってきた。

一応、端末からシステムコマンドを呼び出してステータスを確認するけど……。特に問題なし。

なんで止められてるんだろう、自分。

「忘れ、物……」

そうこうしている内に、“彼女”の方も自信喪失。涙目になっていく。

ヤバい。泣かせた!? でもどうしよう。皆目見当がつかない。

スーツは着てるし、弁当箱を持つてるし、ハンカチだつてポケットにある。それなのに忘れ物? ううむ……。

「ごめんなさい、マスター。ちよつとナナシさんをお借りしますね?」

え。え。え。アルテラちゃん?

困り果てていると、“彼女”の背後からヒョコつとアルテラちゃんが登場。手を取られた自分はリビングへと歩かされる。

そして、ある程度まで行った所でアルテラちゃんは停止した。

「ナナシさん。そこに正座してください」

……はい。

振り向いたその顔は、笑顔。

とても可愛らしく、思わず頭を撫でたくなるはずが、何故か今は迫力満点に感じてしまい、ビシッとフローリングを差す指に、従わざるを得なかった。

「いいですかナナシさん。マスターが言っているのは、忘れている『こと』がありませんか？ という意味だと、アルテラは考えます」

忘れ物ではなく、忘れている『こと』……。

大した違いのない言葉だが、意味する所はかなり違ってくる。

物品を忘れているのではなく、何か、行うべき事を忘れているのか、自分は。

しかし、やはり思い当たる節が無……あ！ 朝ごはんの御馳走様を忘れてた！ け

ど、これで引き止めはしない、よなあ？

相変わらず首を捻るしかない自分だったが、そんな鈍感男の前に、アルテラちゃんはキラリ、目を光らせ――

「つまり、マスターの求めているものは……。行つてらっしゃいのちゅー、なのですよ！」

――と。トンでもない事を言つてのけるのだった。

思わず、な、なんだつてえー!? と驚愕してしまう自分。

アルテラちゃんが瞬間的にメガネをかけたように見えただけ、たぶん気のせいだろう。

にしても、い、行つてらっしゃいの、ちゅー、ですか。

そればかりは考えつかなかったというか、そんなことを要求してもらえるなんて、思つてもいかなかったと言いますか、ねえ……。

「という訳なので、がんばってくださいね? マスターを泣かせたりしたら、悪い文明として、ふおとんれい! しちやいますから」

はあ……。

につこり微笑むアルテラちゃんに、また手を引かれて立ち上がり、自分は玄関へ追いやられる。

まだ腑に落ちないが、取り敢えず元の立ち位置に戻ろうとすると、「彼女」は膝を抱えてしゃがみ込み、不貞腐れていた。

「……むー」

ジト目になり、不服そうにほっぺたを膨らませる「彼女」。

初めて見る表情だけど、ああ、なんて可愛らしいのか。抱き締めた。

が、今求められているのは、もっと過激な行為のはずで。

緊張を紛らわせるため、自分は大きく咳払いしてから本題に入る。

う、うおっほん。

あー。忘れ物、しました。気が付かなくて、ごめんなさい。

「別に。謝られるような事じゃ、ありませんし。それで、何を忘れたんですか？」

……ええつと。

“彼女”はすつくと立ち上がり、素知らぬ顔でのたまう。

さつきまで涙目だった瘵に、天邪鬼め。

けれど、おかげで気も楽になった。自分は、“彼女”の両肩へ手を置く。目を、閉じてくれるかな。

「……はい」

ピクリ。細い肩が跳ね、次いで、力が抜けていくのが分かった。

言われた通りに瞼を伏せ、少しだけ上を向く顎。

頬はチークを塗ったように赤く、触れられるのを唇が待つてくれている。

不思議と、もう緊張はしていない。

ただ、己が本能の望むままに。

自分も目を閉じて、“彼女”との距離を、ゼロにする。

「ん」

まず感じたのは、例えようなない柔らかさだった。

ほんのりと水気を宿し、とろけるような熱を持つそれが、ただ触れ合うだけでは物足りないかと、こちらの唇をついばむ。

自分としても同感であり、何もかもを一先ず置いて、*彼女*を貪る。

「ん、ん……んむ、う……」

甘い快感。

誤魔化しようのない、情欲の伴う快感に鳥肌が立つ。

ずっと、こうしていたい。

仕事とか、セイバーさん達の事とか、*彼女*の背後で見守っているはずのアルテラちゃんとか。

そういつた事柄を全て投げ捨て、永遠に貪り合っていたい。

んが、そうも行かないのが実情だ。

特に三つ目。絶対アルテラちゃんに見られてるといのがマズい。

このままだと理性で性欲を抑えられなくなる。

そうなれば、見た目一桁な幼子の前で、R-18なラブシーンを演じてしまう事に。

それだけは避けなければならぬと、自分は理性を雑巾のように振り絞り、愛おしい体温を引き剥がす。

——ぷあ、ま、待った、これ以上は——むぐっ!?

「は、あむ……」

あ、駄目だこれ逃げられない。

いつの間にやら、首へ腕を回されていた。

それだけでなく、中途半端に開いた唇の間から、艶かしい「何か」が、口内へと侵入してくる。

控えめに。探るように。おずおずと彷徨う「何か」を、反射的に舌で絡め取る。

背筋をゾクゾクとさせるそれは、間違いなく「彼女」の舌だろう。

小さかった。

小さくて、でも、その存在を感じると、自らが満たされていくような、初めての感覚。

堪らない。

堪らなく、そそられる。

もうこのまま、「彼女」を押し倒したって構わないだろう。

きつと、拒まれはしない。拒まれた所で、もう我慢なんか。

……いやいやいや駄目だ駄目だ駄目だつ。

性欲に流されたらいけない！　しつかりしろ自分、大人だろう!!

仕事だつてあるんだし、ここは一つ、大人の男として節度ある行動を取らねばつ！

——つは、だ、駄目だつてんむつ……つ……つはあ、ほ、本当に遅れるうぶつ。

「ん……んうむ……やあ、です……もつとお……」

渾身の力で振りほどこうとするものの、ビクともしない「彼女」の細腕。

時折、言葉を発するために唇が離れるけれど、またすぐに塞がれてしまい、段々と思考までもが蕩けていく。

唇を重ね、舌を絡め、唾液を啜り。

雄としての欲望に、か弱い理性は容易く駆逐される。

朦朧とする意識の中、自分が最後に見たのは。

「良かったですね、マスター。愛の文明^{メモリー}、ちゃんとして記録してますからね？」

ドアの隙間からこちらを覗き、ビデオカメラ片手に微笑む、白い幼子だった。松崎し〇るか！ という自分の突っ込みは、「彼女」の小さな舌に絡め取られて、言葉となる前に消えていった。

なお、仕事には遅れました。ええ。

言峰社長の慇懃な嫌味にも、かなり慣れてきた今日この頃です……。

○余談 ある日の食卓。五人で鍋をつつきながら、三位一体のザビ子について。

ところで、キャスターさん。

前々から気になってた事があるんですけど、質問してもいいですか？

「なんですか、モブ男さん。あ、私のスリーサイズは御主人様しか知り得ないトップシー

クレットですから、お教え出来ませんので。あ・し・か・ら・ず♪」

そんな物には毛筋ほども興味ありませんので御安心下さいねー。

時々、精神の奏者とか、魂の御主人様とか、肉体のマスター、って表現を使うじゃないですか。

あれってどういう意味なのかなー、と思つて。

「ああ、あれですか。もう別段隠す事でもありませんし、お話しして差し上げましょう、この唐変木。

オツホン。以前、御主人様が不測の事態に陥つてしまった際、その打開策として、一時的に三人に分裂してしまった事があつたんです。

その時の御主人様達、それぞれの呼称が、電脳体を構成する三要素である精神・魂・肉体だったという訳です。お分かりになりました？」

三人に分裂!?

そ、そんな事、可能なの？

「ふっふっふ。不可能を可能とするのが、余の奏者の最も大きな特徴だからな！

いや、普通はやらぬというか、絶対に無理な事でもあったのだが。

そのままでは消滅は免れぬし、そもそも、分裂する時に死んでしまっても不思議ではない。

……今思うと、本当に無茶をしたな奏者よ!？」

「だって、あの時はもう、それしか思いつかなくて……。それに、結果だけ見れば大団円な訳だし」

「終わり良ければ、全て良し……ですよね？ マスター、合ってますか？」

「うん、正解」

はあ……。凄いなあ……。

いまいち想像できないけど、電脳体が分裂って、どんな感じなんだろう。

「んー。なんと言いますか、今の御主人様を構成する要素を、三分割して特化した、と思つて頂ければ。」

私の所に現れた魂の御主人様は、いわば本質の御主人様。

前向きなのは変わりませんが、どちらかと言うと受け身で、でもでもでも！ 色気は

当社比300%アップ!

もうタマモ、襲い掛からない様にするのが精一杯でした! いえ、むしろ襲っておけば良かった……っ!

「後悔先に立たず、とはよく言った物よな。

ちなみに、余の所に現れた精神の奏者は、非常に情熱的でなっ?

もうとにかく何事にも前のめりで、普段なら絶対に言ってくれない様なことも言ってくれたのだ!

ああ、あの頃の奏者が懐かしい……」

「二人とも、むせび泣くほどのこと……?」

アルテラには、精神と魂が抜け落ちた、肉体の「彼女」が側に居たんですけど。

経験も何もない状態だったので、自分の性別に寄って判断する事が多かったみたい、です。

今のわたしより女の子らしい、と言っても良いと思います」

情熱的……。色気……。より女の子らしい……。

「ナナシさん? どうかしました?」

いやね、アルテラちゃん。

その三人が、もし一堂に会してたらさ。

……天国だったんじゃないかなあ、と。

「おや。珍しく意見が一致しましたねモブ男さん。

でも残念でしたあ、貴方はもう絶対に“あの”御主人様とは会えないんです。

儂げなのに色気たっぷりな御主人様は、私だけの御主人様なのです！

羨ましいですか？ 羨ましいですよね？ 羨ましいでしょうとも！ はっはっはっはっは

マア

「余もだな、情熱の奏者とは甘い日々を過ごしたのだぞ？

一つのベッドで、指を絡め合って、甘い夜を……。

どうだ、ナナシノよ！ 奏者とのラブラブ度合いでなら、決してお主には負けぬから

な！」

……ふっ。

キスした事もない癖に。

「あ!? いいいい、言ったなあ!? 言っではならぬ事を言ったなあ!」

「やだもーモブ男さんつたらー。それを言ったら戦争じゃないですかー。

はいセイバーさん、根性棒。ええつと、破戒の警策は……あつたあつた」

ちよ、先に自慢してきたのはそっちじゃないですかつ。

痛、やめて地味に痛い!

そして痛いのに何かが充填されていくような不思議な感覚がっ!

「……マスター。みなさん、仲がいいですね? 楽しそうです」

「うん、そうだね。うん? うん、そうだよね。そういう事におこうね」

第三話

「彼」の行動は、この量子虚構世界——S.E. R.A. P.H.において、全くの無駄でしかない行為だった。

ザク、ザク、ザクと。石で地面を掘る、男性の後ろ姿。

ごく普通のシャツとズボンを着るその人は、無心に地面を掘っている。

すぐ側に立つ私の存在にも気付かぬほど、一心不乱に。

「あの……」

何故だろう。私は「彼」に声を掛けていた。

思考ルーチンに異常をきたしただけのNPC……かも知れない人物が、妙に気になつて仕方なかったのだ。

「なんですか」

振り返った男性の顔に、呼吸を忘れる。

なんの変哲も、特徴もない。まさしく平凡な顔立ちを彩っていたのは、深い影だった。そう、影。

トワイス・ピースマンの抱えた歪みでもなく、殺生院キアラの見出した昏い欲望でもなく、アルキメデスの目指した狂気でもなく。

誰もが胸に宿しうる、負の感情。その影だと感じた。

「……………」

押し黙っていると、“彼”はそのまま作業に戻ってしまう。

地面に、小さな首輪が置かれていた。墓標を立てようとしている……のだろう。さつきも言ったけれど、全くもって無駄な行為だ。

SE・RA・PHにおいて、死とは消滅そのもの。

情報体ではない私達は、それを定義付ける命を失った途端、意味消失して塵と消える運命。

いや、きつと塵すら残らない。肉体を構成していた霊子は、最小単位まで分解された後、世界に満ちる情報資源となる。

ムーンセルが運営する月において、輪廻転生とは、冷酷なまでのリサイクルシステムに過ぎないのだから。

“彼”がそれを理解しているかは分からない。

そもそも、最近になって現れ始めた人間なのか、NPCなのかすら、分からない。それ程までに、生命の気配が薄かった。

拒絶されているのだ。このまま立ち去ったって、誰も文句を言わないだろう。

せつかく霊子ヒドウンを駆使し、セイバーとキャスターの求愛行動から逃れて来たのだから、平和な世界を思う存分に散歩して、心をリフレッシュするべき。

でも。

「…………あの」

私はもう一度、“彼”に声を掛ける。

反応はない。

それでも諦めず、隣に座り込んで、また。

「私にも、手伝わせて貰えませんか」

覗き込むようにして言うと、ようやく目が合った。

深い影に彩られた、黒い瞳。

ただただ、悲しそうな瞳。

隠すように伏せられた顔から、透明な雫が零れ落ちる。

それに気付かないフリをして、私は手近な石を手に取り、動きを止めてしまった。彼
の代わりに、小さなお墓を掘る。

“彼”の行為は、S E・R A・P Hにおいて無駄でしかない。

でも、人にとって無意味な行為ではないと。

私には、そう思えた。



「では、私は仕入れに行つてこよう。後を頼む」

はい。行つてらっしゃいませ、言峰社長。

懇懃な態度で、こじんまりした事務所のドアをくぐる、黒服の男性。

それを見送りつつ、自分はデスクから立ち上がり、頭を下げた。
パタン。

ドアの閉まる音を確認してから姿勢を正すと、もう事務所の出入り口に人の気配はない。相変わらず、忍者みたいな人だな……。

ここは、自分の仕事場。ことみねしょうかい言峰商会の事務所。その受付である。

先程の男性——ことみね言峰 きれい綺礼さんが立ち上げた、従業員十名ほどの小さな会社であり、SE. R.A. PHを行き交う物流を監視し、時に管理し、正常な商取引きのサポートをするのが主な業務である。

どこに何があり、誰に所有権があり、これからどこへ向かい、誰が何を求めているのか。

情報を欲している団体の依頼を受け、それを提供する。

時々、「これが欲しいんだけど」という直接の依頼もあり、社長が動くのはこういう案件だ。

こう説明すると小難しく感じられるかも知れないが、実際にはそう難しくもなかったりする。

何せ霊子虚構世界。あらゆる物が情報データで構成されているから、然るべき情報網さえあれば、簡単に把握できるのだ。

まあ、その情報網を確立するのが普通は難しいんだけど、この職場では最初から確立されていたし、それを扱うためのツールもあつたので、大して苦労した覚えがなかった。

それというのも……。

「もう出立なされたんですか、社長は」

社長と入れ替わるように入室してきた、釣り目がちな年若い少女のおかげだ。

おさかぜのり
長風 紀。

ポニーテールと眼鏡、腕に抱えたタブレット端末が特徴の彼女は、かつて聖杯戦争の舞台であつた、月海原学園のNPCだったらしい。現に今も学生服を着ている。

そうとは思えないほど人間味に溢れているため、自分は普通に接していた。

というか、この会社で雇っている他のNPCの人達も、ちよつとばかり意志薄弱で無

口で存在感が薄いだけで、普通の人と変わらないように感じるのだが、それはそれとして。

彼女こそ、情報収集・集積管理・分析を行うプログラムの製作者であり、監督役だ。怒ると高飛車な言動をみせるものの、非常に頭の回転が早く、副社長の任に就いている。

ちなみに、自分は長風さんの作ったプログラムを使い、雑務をこなしているだけ。それだつてNPCの皆が頑張ってくれちゃうので、来客の応対や事務所の掃除などが、実質的な自分の仕事だった。

この間みたく、一日泊まり掛けの仕事というのは、けっこう珍しいケースなのだ。さて。いい加減、長風さんに返事しないとな。

はい、副社長。たった今、お出かけになりました。

「なら良いですけど。……時に、奈々篠さん」

はい？　なんですか、副社長。

「副社長という役職で呼ぶのは止めて欲しいと、前に言っただけですが」

ツイ、と眼鏡のつるを指で押し上げ、長風さんが眼を光らせる。

怒ってはいないけれど、ほんのり不機嫌な時に見せる仕草だ。

な、なんでいきなり御機嫌ナナメなんだろう。

でも、役職的には副社長の方が上ですし、能力的に見ても……。

「そういうのはどうでも良いんです！　というか、貴方は嫌じゃないんですか。年下の女に謙るなんて、情けな……あ、いえ、いえ。その」

ビシバシと強い口調で語っていた長風さんだが、不意に口元を手で覆い、申し訳なきような上目遣いをこちらへ。

勢いで罵ってしまったのが気不味いんだと思われる。実に分かりやすい。

特に気にもしてなかったのに、自分は彼女に安心してもらうべく、愛想笑いを浮かべる。

別に、自分は気にしてませんよ。

長風さんは副社長で、自分はその部下。それが一番の適材適所だし。

仕事には厳しいけど、むやみやたらと威張り散らしたりしない人だって、知ってます

から。

「だから、そういうのを止めて欲しいと……。それに、苗字じゃなくて……」

……？ すみません、最後の方、聞き取れなかったんですが……？

「もういいですつ！ そんな事より、社長の留守を任されてるんですから、仕事仕事！」

はいはい。分かってますよ、副社長。

「〴〵はい〴〵は一回で！」

何時もの調子を取り戻した長風さんに、首をすくめつつ、はい……と返事。

やつぱり、彼女のハキハキとした声を聞かないと、仕事が始まった気がしない。

……Mじゃないですよ、自分。好きな人には押し倒されてばっかだけど。

とまあ、こんな感じで一日が始まり、長風さんの指示に従って庶務をこなすこと数時間。

もうすぐお昼という頃合いになって、事務所のインターホンが「ピンポン」と鳴った。来客のようだ。

「ごめんなさい、私、今は手が離せないのです。奈々篠さん、応対して貰えますか」

了解です。

受付の更に奥に居る長風さんに了承の返事をし、自分は席を立つ。

セキュリティを考え、ドアはオートロックになっているので、従業員による出迎えは必須なのだ。

加えて、ドアを開ける前に外部カメラで不審人物でないかを確認してから、という面倒な手順も必要になるが、扱っている商品が商品だし、警戒するに越した事はない。

無駄に広い応接スペースを横切り、事務所入り口に辿り着いた自分は、ドアの脇にある端末の受話器を耳に当て、来訪者への応対を始める。

大変お待たせ致しました。言峰商会に御用で……？

「恐れ入る。……この社員に用が……む？ その声……」

——のだが、同時に端末の画面が映し出した人物は、見覚えのある人物だった。赤い外套。短く刈り上げた白髪。浅黒い肌。鋭い眼光。

これだけの特徴を併せ持つのは、あの人しか思い浮かばない。貴方は、“彼女”の……。

「うむ。幾度か会った事があるが、覚えていたなら話が早い」

あ、ですよ。名前は確か……紅茶さん？

「アーチャーだ！ それは、私と別のアーチャーを区別するのに使われた俗称だっ」

えっ。ああっ、すみません！

セイバーさんとかがそう呼んでたもので、変だなあとは思いつつ、そういうお名前なのかと……。

「全く、あの赤セイバーめ……」

深い溜め息と共に、カメラ越しの紅茶さん——じやなかった、アーチャーさんが額に手を当てる。

や、やってしまった……。人の名前を間違えるとか、こういう商売じゃ致命的だ。

今回はアーチャーさんが相手だから大丈夫……。だと思いたいけど、二度とないようように気を引き締めないと。

でも、ひとまず反省は後回し。早めに用件を確認せねば。

それで、どのような御用件でしょうか。あいにく、社長は留守でして……。

「いや。先程も言ったが、ここの社員——君に用があつて来たのだ。私“達”は」

自分に？ ……達？

「ああ」

うなずき返すアーチャーさんに、こちらは首をかしげるばかり。

彼に名指しされたのも疑問だが、達という事は、誰かと連れ立っているんだろうか。

……考えていても仕方ない。害意のある人じゃないのは確実なんだから、直接顔を合わせて確かめよう。

少々お待ち下さい、と断りを入れて、自分は受話器を端末に戻し、すぐ側のドアを引
き開ける。

正面に立つ、自分よりも背の高いアーチャーさんと目が合った。

お互い軽く会釈を交わし、けれど、彼はすぐに体を半身ほどズラす。

背後に居たのは――

「こんにちは、ナナシさん。来ちゃいました」

――突撃訪問の常套句を笑顔で言う、白い幼子。アルテラちゃんだった。

予想外な人物の登場に困惑しつつも、こんにちは、と返し、膝について視線の高さを
同じに。

どうしたんだい、こんな所まで。初めてだよね、こういうの。

「えつとですね。わすれものを、とどけに来たんです。……はい、どうぞ!」

これは……。

どこからともなくアルテラちゃんを取り出したのは、その手には大きく見える、緑色

の布に包まれた物体。

見覚えのあるサイズ。確かめずとも、何なのか分かった。

ズバリ、“彼女”が作ってくれたお弁当だ。

ちゃんと情報化して、アイテムボックスに格納したと思っていたのだが、こうして目の前にあるのだから、つい忘れてしまったのだろう。今日は凡ミスが多いな……？

ありがとう、アルテラちゃん。うっかりしてた。

君が持つて来てくれなかったら、ひもじい思いをする所だったよ。

「わたし、お役に立てましたか？ マスターにも、ほめてもらえますか？」

うん。もちろん。

「えへへへへ。やりました！」

太鼓判を押しあげると、パアッと明るい笑顔が咲いた。

ああもう、アルテラちゃんは可愛いなあ。

許されるなら頭を撫でくり回したいくらいだ。不審者まっしぐらなのでやりません

が。

しかし、この子が届け物に來たつて事は、アーチャーさんは……？

いくら劍兵のサーヴァントとはいえ、アルテラちゃんは純真無垢で、精神的にもまだ幼い。多分、付き添いなんだろう。

自分は弁当片手に立ち上がり、彼に改めて頭を下げる。

アルテラちゃんの付き添い、ありがとうございます。

よかつたら、上がつて行つて貰えませんか？ 取つて置きのお茶を淹れますから。

「いや。君の言う取つて置きには興味があるし、気遣いも有り難いのだが、結構だ。実はまだ、渡すものがあつてな」

申し出に丁寧な断りを入れてから、アーチャーさんがふと、上の方へ視線を逸らす。向けられた先に、あえて自己主張させてある監視カメラ。

なんだろうと思つたが、質問するより先に、彼の方から話が振られた。

「出来れば、人目につかず、落ち着いて話のできる場所が良い。もうすぐ昼時だろう？ 悪いが、ご足労願えるだろうか」

人目につかず、落ち着いて話のできる場所……。

これで相手が美少女だったなら、もしや告白か!? と馬鹿な考えも浮かぶけれど、精悍な偉丈夫が相手では勘違いのしようもない。

お腹も空いてるし、言われた通り時間も丁度良い。長風さんに許可を貰って来ますかね。

分かりました。同僚に断りを入れてきますから、申しわけありませんが、少しだけお待ち頂けますか？

「すまない。それと、私相手に謙る必要はないぞ。なにせ君は、『彼女』のお気に入りだから」

はあ……。そういうもの、でしょうか……？

なんとも答えに困る返しを、曖昧な笑顔で誤魔化して、事務所へ一旦戻る。

謙るなど言われても、良い意味でセイバーさん達とは違う雰囲気だから、勝手に背筋が伸びるというか、大人な対応の方が楽というか……。

ま、今はそれより、外出許可だ。

自分用のデスク近くまで進むと、長風さんの方から話しかけてくれた。

「少し遅かったですね。もしや、またロクでもないゴロツキでしたか？」

もともと鋭角気味な彼女の眉の間に、更に不機嫌そうなシワが寄る。

というのも、この事務所、その道の人々には有名な存在らしく、それを嗅ぎつけた不良NPC——この場合、品質ではなく素行の事を指す——が、ちよつかいを掛けにくる事が割りとあるのだ。

そういう場合、大抵はカメラ越しの押し問答の末、社長が施した防衛機構で御退場願うことが多い。

落とし穴形式のトラップで、なぜだか落ちる速度が妙に遅く、「デデッデデッデー」という効果音が鳴る。合言葉は没シユート！ である。

ともあれ、今回は違ったのだから、誤解を解かないと。

すみません、違うんです。

お世話になってる所の人が、わざわざ忘れ物を届けてくれて。

それで……。

「ああ、なるほど。でしたら、そのまま帰ってもらおうのもなんですし、丁度いい時間です。早めにお昼、行ってきて下さい」

言わんとする事を察したのか、長風さんはデスクトップPCの画面を見つめたまま、外出許可を出してくれた。

やっぱり彼女、気配り上手だ。

これでお客さんへの愛想笑いが出来たら、自分も楽に……いや、そうだったら自分がクビになるか。それは勘弁。

ありがとうございます。

それじゃあ、お言葉に甘えて、失礼させてもらいますね。

「ええ。ごゆっくり」

変わらず画面を見たまま、そっけなく送り出してくれる長風さん。

口調はアレだけど、実は「行ってきます」とか「お帰りなさい」の挨拶が照れ臭いだけだったりする。『彼女』とは違った意味で難儀な子である。

そんな副社長に向けて、行ってきます、と心の中で呟いてから、自分はアーチャーさ

ん達の元へ。

どうも、お待たせしました。

「うむ。では行こう。近くに良い店がある。アルテラ」

「はい」

たくましい背中が、自分達を先導して歩き出す。

アルテラちゃんと二人、並んでその後を追うのだが……。

一体、どこへ行くんだろう？



アーチャーさんに案内されたのは、喫茶コペンハーゲン・ダツシュという名の喫茶店だった。

こじんまりとした佇まいながら、シックな内装と、控えめに流れるクラシック音楽の

おかげで、趣深い雰囲気を漂わせている。

……けれども、店名から進るパチ物臭が、如何ともし難い残念感を引き立てていた。昼時だというのに、お客さんの姿も少ない。

何故にダツシユを付けたのさ。

にしても、良かったんですかね。弁当を持ち込んだりしても……。

「持ち込みOKと張り紙がしてあっただろう。問題ないさ。……アルテラ、もつとゆっくり食べるといい」

「むぐ、つぐ……。ごめんなふあい、おとうふあん」

「誰がお父さんかつ」

入り口からの視線が届かない、奥まったテーブル席。

自分はコーヒーを頼んで“彼女”の手作り弁当を。

アーチャーさんは紅茶、アルテラちゃんはナポリタンをモツシヤモツシヤと食べている。

うゝむ。白髪に褐色の肌。事情を知らなければ、親子にしか見えないよ。この二人。

「さて。唐突だが、これから私が言う前置きを、よく聞いてくれ」

アルテラちゃんの口元を紙ナプキンで拭き終えて、今度はこちらを見据えるお父さん。もといアーチャーさん。

その真剣さに釣られ、自分も思わず姿勢を正す。

「私はこれから『ある物』を君に渡すが、それは私が用意したものではなく、あくまで代理として渡すだけだ。決して他意はないし、誤解もしないで欲しい。良いだろうか？」

……事情はよく分かりませんが、言わんとする事は理解しました。

「よし。では……受け取るかい」

自分が領いたのを確認すると、彼は右手を、掌を上にして差し出した。

ラッピングされた箱が乗せられている。

形状はハート。色はピンク。真つ赤なりボンは蝶々結び。

そして唐突に思い出す。今日の日付は、二月十四日。ヴァレンタイン・デー。

きつと中身は——チヨコレート。
アーチャーさん……。これ……。

「言われる前に繰り返すが、決して私が用意したものではないからな。
友チヨコという風習があるのも知っているが、それとも違うからなっ」

いや、そんな力説しなくても分かりますっつてば。

あまりにも必死なアーチャーさんに、自分は苦笑いを浮かべてしまう。

男が男にヴァレンタインのチヨコを作つて渡すなんて、あり得……。……なくもないのが怖いけど。今の時代。

ついさつき本格的に知り合つた自分達の間には……。……以前からの片思いという可能性があるか。

いやいやいやいや、何を考えてるんだ自分は。常識的に考えてあり得ないっつてば。

それに、自分にチヨコを贈つてくれる女性なら、一人だけ心当たりもあるし！

……。 “彼女” から、と考えると、良いんですよね？

「……そうだ。こんな形で渡すのを、『彼女』も不本意に思っているようなのだが、これも作戦でな」

作戦？ と首を傾げると、アーチャーさんが大きく頷く。

「普通にチョコを渡そうとしても、セイバーとキャスターに邪魔される可能性が高いだろう？」

そこで、あえて彼女達用のチョコを一つだけ用意し、カルナに預けた上で、争奪戦をさせている。

その隙に、わざと渡し忘れた弁当を届ける影で、本命のチョコを私とアルテラが渡す……という手筈だ」

なるほど。そっか、わざとだったんですね……。

言われてみれば、もつともな話だ。

自分が『彼女』からのチョコを貰う場面に、セイバーさんとキャスターさんが居合わせたら。

修羅場が発生するのは火を見るよりも明らかである。

それを未然に防ぐため、擬似餌でサーヴァント達を誘い出している訳か。大丈夫なんでしょうか、そのカルナさん。

時々、宮殿エリアで見かけてた線の細い……ビジュアル系の人ですよね？

「……まあ、その認識で間違っつてはいないが。

問題ない。カルナはS E・R A・P Hに顕現しているサーヴァントの中でも、最強の部類だ。

セイバー達が本気を出したとして、勝てる確率は低いだろう」

でも、「彼女」のチョコを奪うためなら、あの二人、なんの躊躇いもなく反則行為とかしそうな気がするんですけど。噂に聞く王権行使とか。本当に大丈夫……なんですよね？

「……そんな事より、早くチョコを食べてやるといい。食べたのを確認するまで帰れないのでな」

誤魔化しました？ アーチャーさん誤魔化しましたよね、今。

彼は紅茶のカップを傾け、優雅に明後日の方向へと目を向けている。

いくらカルナさんとやらが強くても、ムーンセル——世界そのものから支援を受けたサーヴァント二騎相手では、分が悪いのかも知れない。

そこはかたなく不安と罪悪感が湧き上がるけれど、自分に来ることなんて、それこそ無い。ここは素直にカルナさんに合掌して、「彼女」からのチョコを頂こう。

ピンクの包み紙を破かないよう、丁寧に解いていくと、黒い無地の紙箱が現れる。

大きな期待と共に開ければ、ハート型のチョコレートの上に、装飾用ホワイトチョコで「Happy Valentine!」と書かれていた。

……うん。別に、落胆はしてませんよ。

しから始まる四文字を期待してた訳じゃ……嘘です。メチャ期待してましたです、はい。

まあ、アーチャーさんとかに見られるのを恥ずかしかった、のかも。そう思っておこう。

では、頂きます。

「うむ」

「……いいなあ。アルテラも食べたい、です」

「我慢しなさい。家に帰れば、*彼女*が用意してくれているから」

「はあい、パパ」

「誰がパパかつ」

かじるのも惜しいような、そんな気持ちでチョコを手につくと、アルテラちゃんが物欲しそうな顔で指を咥える。

アーチャーさんが窘めるも、パパ呼びに突っ込まざるを得ないようだ。

じゃれ合っている姿は本当に親子っぽくて、なんだか、おかしくなってしまう。

「……どうした。食べないのか」

あ、いえ。アーチャーさん、信頼されてるんだな、と思つて。

「信頼？」

ええ。アルテラちゃんもそうでしょうけど……。 *彼女*からも。

こういう、想いを込めた物を託されるって、相手から信じて貰えてないと、無理な事

ですから。

自分は、その。何がどう転んだのか、*「彼女」*に好いて貰ってるみたいですけど、サーヴァントみたいな*「力」*は無いし。

だからちよつと、*「彼女」*の助けになれる皆さんが羨ましいな……とか思っちゃいまして。あはは。

「……………」

沈黙。

自分でも、妙なことを口走っている自覚はあつて、笑つて誤魔化そうとしたが、失敗してしまった。

どうしてこんな話を……？ *「彼女」*の側で、共に戦える男性への嫉妬？
大好きな女の子からチョコを貰ったんだ。

手放しで喜ぶべきなのに、胸の奥がモヤモヤしていた。

「何を言うかと思えば、全く。よもや、そんな事を考えているとはな」

そんな様子を見て、アーチャーさんは腕組みをしつつ、深く溜め息をつく。呆れ果てた。

彼の瞳が、そう告げている。

「その分だと、自分に戦う力が無い事を恥じているんだろう。

何かあった時、『彼女』の助けにはなれないと。足手まといにしかならない、と。

……敢えて強い言葉で言おう。馬鹿か、君は」

叱責するような、重く鋭い声。

驚きで、自分は目を丸くする。

叱られた事に驚いているのではない。たったあれだけの言葉のやり取りで、胸の内を正確に計られた事に、驚いていた。

言われてみれば納得だ。

自分は、自分の弱さを齒痒く思っている。

サーヴァントという存在と、ただの人間である自分とを比べ、劣等感を覚えている。そもそも、比べる事自体がおこがましいのに。

「確かに、『彼女』の未来には、これからも戦いの影がつき纏うだろう。

SE. R.A. PHの平和を乱す者。王権を奪えると勘違いした者。そんな輩は必ず出てくる。

その時、君が前線に立てない事は間違いない。たとえ立つたとしても、邪魔にしかならん。

……だがな」

続くアーチャーさんの言い分は、厳しくも正しい、まさしく正論。けれど、その声音から、不意に険が取れる。

「『彼女』の未来に、戦いしか残されていない訳ではない。

何もない穏やかな日々が。平穩無事な日常があつて、おかしくはないいや、なくてはならないんだ。

しかし……。その時、隣に居るのが我々では、きつと駄目なんだよ」

自嘲染みた笑みを浮かべ、アーチャーさんは遠くを見つめた。

彼が見ているのは、戦いの日々ではないのだろう。

彼が見たいと思つてゐるのは、そんなものとは——サーヴァントとしての存在意義とは掛け離れた、安らかなる日々。

そうでなければ、自分は彼の瞳を、優しいとは感じられなかつただらうから。

「『彼女』は月の絶対覇者。けれど、同時に年頃の少女だ。

戦場で我々が隣に立つように、日常で隣に立つ者が必要なんだ。

……君は知らんだろうが、『彼女』はウロウロとそこらを歩き回り、戦々恐々としていたぞ？

ちゃんと受け取つて貰えるだろうか。美味しいと言つて貰えるだろうか、とな。

どんな敵を前にしても挫けぬ、鋼の精神を持つ『彼女』が。あんな姿は、初めてさ」

小さく「ふっ」と、思い出し笑いをするアーチャーさん。

それを消さないまま、彼はまた、こちらを見つめる。

分不相応な嫉妬を抱える愚かな男を、信頼しているかのような眼で。

「もつと胸を張るといい。

君は確かに、『彼女』の隣に立っている。

月の王権代行者ではなく、ごく普通の、少女の隣で生きている。そこは、私達にはもう、辿り着けない場所だ」

彼はハッキリと、断言して締めくくる。

その言葉には、祈りにも似た「何か」が、込められているように思えた。

今、この時代を生きる生命に対する、願いのような。

自然と、自分は笑っていた。

「何を笑っている」

「彼女」がアーチャーさんを信頼する理由、分かった気がして。

……ありがとうございます。

「……説教されて礼を言うとは、変わり者だな。やはり、君達は似合いのカップルだよ」

皮肉を口にしつつ、紅茶のカップに隠される直前、口元には緩やかな弧が描かれていた。……と、思う。

様子を伺っていたらしいアルテラちゃんも、安心したのか、ニコニコと微笑む。

こうして、自分の記憶にある限り、生まれて初めて過ごす二月十四日は。

生まれて初めてのヴァレンタイン・チョコレートと、新しい友人を得る、輝かしい記念日となったのだ。

……うん。チョコ、甘くて美味しい。



「無事、渡し終えたようだ。アーチャー」

唐突に、並んで歩くアーチャーとアルテラへと、声が掛けられた。

青年と別れ、帰路に着いて数分と経っていない頃である。

待ち受けていたのだろうその人物は、言うなれば、絶世の美男子であった。

絹のように艶やかな白髪と、鋭く切れ長な眼。

血が通っていないかのように白い肌を、黒装束と華美な黄金の鎧で包む出で立ちは、

ごく一般的な二十一世紀の街並みから浮かび上がり、尋常ならざる存在感を放つ。
名を、カルナ。

SE・RA・PHに現界する、特Aランクのサーヴァントだ。

「カルナ、か。セイバー達はどうした」

「おそらく、今も戦っている。

囿のチョコを持って逃げるのが、オレに与えられた任務。

しかし、その囿がセイバーとキャスターの攻撃の余波で消し炭になってな。やれ『お主のせいだ!』、やれ『貴方のせいです!』と罵り合い始めた。

もうこちらの事など眼中にない様子だったので、これ以上は不要と判断し、こうして退避してきた訳だ。

あの勢いならば、明日の今頃までは戦い続けるだろう」

「……あの二人らしい、といえば、そうなのだろうが……」

互いに責任転嫁しながら、周囲の迷惑も考えず、全力でバトルする赤と青のサーヴァント。

その姿が目には浮かぶようで、アーチャーは頭を抱えた。

こんにちは、と挨拶を交わすアルテラ・カルナの隣で、周辺にNPCが居ないよう祈ってしまおう。

「それより、アーチャー。お前の方こそどうしたのだ。気落ちしているように見えたが」「ん……？　気のせいではないか。別段、気分が落ち込むような事は起きていない」「いや、確かにそう感じた。例えるなら……。

小さい頃から兄と慕って来ていた隣の家の娘に恋人が出来て、初めて自分の気持ちに気付いたものの、その幸せを願って身を引こうとする男のような。

そんな雰囲気だった」

「やけに具体的だな。いつもの寡黙さはどこへ行った！」

「む。言葉足らずで誤解させてはマズいと思い、可能な限り言葉を尽くしてみたのだが……。やはり難しいな」

三人、歩きながらの雑談の中で、相変わらず人を食った物言いのカルナに、アーチャーは突っ込まざるを得ない。

どうせかつてのマスターに何か言われたのだろうが、いい迷惑である。

ちなみに、さつきから黙っているアルテラだが、カルナに貰った棒付きキャンディー

を一生懸命に食している。

会話に加わった所で、場の属性が混沌に近づくだけであろうから、これだけは怪我の功名か。

「『彼女』と、『彼』の事だろう。気に掛けているのは」

「……………」

現れた時と同じく、カルナは唐突に、ふざけ半分だった空気を切り捨てる。

本当に、事の核心を突くのが上手い男だ。

そう。カルナは確かに言い当てている。

ボウっと、街中を歩きながら考えていたのは、あの、歳若い恋人未満な二人のことだったのだから。

「直接話した事はないが、『彼女』が選んだ男だ。心配は要らないと思うが…………」
「心配？　心配などしていない。」

ああ見えて、『彼女』の人を見る目は確かだし、『彼』の実直さは得難いものだ。
むしろ、ホツとしているよ。『彼女』にも乙女らしい部分があったのだとな」

ニヒルに口元を歪め、アーチャーが肩をすくめた。

アーチャーの知る「彼女」と、この世界に存在する「彼女」とは、厳密には同じ存在ではないと思われる。

が、少なくとも、性根の部分では全く変化がないと、アーチャーは感じている。

「彼女」はやはり「彼女」で、だからこそ、違う。

見た事がなかった。

誰かに想いを寄せ、その事に苦悩する姿など。

喜ぶべき事だ。

偽りの学生生活から始まり、戦いの中で自己を確立していった「彼女」の、新しい門出とも言える。

「彼女」に想われる青年とも言葉を交わして、頼りない部分はあるものの、善人であること確信もできた。

誰かが悪意を以て邪魔しない限り、彼等は遠くない未来で結ばれるだろう。

セイバーやキャスターだって、心の奥底では「彼」を認めているに違いない。

そうでなければ、仮宿とはいえ、一つ屋根の下で生活する事を認めはしないはず。

まあ、結ばれるまでの間に、無駄な障害物競走を幾重にも仕掛けそうではあるが、い

ざとなれば、多分……。きつと……。おそらく……。

ともあれ。

戦いの中で絆を育むしかなかった「彼女」が、戦い以外で——平穏な日常の中で、ようやく掴んだ絆だ。

成就するまで影から見守りたいというのは、アーチャーの偽らざる本心である。

……しかし。

「ただ……。そうだな。認めるのは癩に触るが、柄にもなく……。寂しいのだろう、私は」
カルナに言われた表現とは違うけれど、一抹の寂しさを感じているのも、また事実なのだろう。

雛鳥の巣立ちを間近に控えた、親鳥のような。

本当に、柄にもない心境にさせられていた。

青空が眼に沁みる。

と、そんな時。アーチャーの手が引かれた。

黙って話を聞いていたはずの、アルテラ。

言いたい事でもあるのか、何度も手を引く。

求めに応じ、視線の高さを合わせ、話を聞く体勢になるアーチャーだったが、アルテラは何も言わず。

ただ優しく、アーチャーの頭を撫で始める。

「さびしいのは、ダメです。アルテラが、なぐさめてあげます。だから、元気だしてください。……ダディ？」

「誰がダディかつ。ワザとか？　ワザとなんだな君はっ！」

「きやー」

いい雰囲気になるかと思いきや、脈絡のないダディ呼び。流石のアーチャーもクールでは居られない。

けれど、アルテラは悪戯つ娘な笑みのまま、コロコロと笑い声を上げて走り出す。全く、どこであんなボケを覚えたのか。

セイバーとキャスターの影響に違いないだろうが、あの有害指定サーヴァントめ。

「アーチャーよ」

「……なんだ」

「言つて良いのか悪いのか、オレにはよく分からないが。今のお前は、楽しそうにも見えるぞ」

心で毒づくアーチャーに、またしてもカルナが指摘する。

言われて、ようやく気付いた。

立ち上がるアーチャー自身が、自然な笑みを浮かべている事に。

……らしくもない。

「さて、ね。私はただの、弓兵の英霊だ。今更だろう、そんなこと」

「しかし『彼女』であれば、だからこそ望むのだろう。過去の残像でしかないオレ達に

すら、『今を生きる』という事を」

「……かも知れないな」

英霊とは、既に終わった存在だ。

どれほど人に近い存在だとしても、この時代に生きる正真正銘の人間とは、在り方が違う。

だが、確かに。『彼女』であれば言いそうだった。

どこまでもお人好しな、あのマスターであれば。

「お二人とも、どうしたんですかー？ 早く帰って、マスターに“ほーこく”しなきゃ、ですよー！」

「呼んでいるぞ、アーチャー」

「……やれやれ。仕方ない、行くとしよう」

振り返り、大きく手を振るアルテラに、アーチャーは苦笑いを浮かべ、肩をすくめて歩き出した。

カルナもそれに続き、三人のサーヴァントは、並んで家路を急ぐ。その足取りは、意外なほどに軽かった。

《ザビ子性分が足りないという方々へ。先取りホワイト・デー》

いつも通り仕事を終え、端末に設定されたドア型ポータルをくぐり。

自分は、ローマ領域にある「彼女」の邸宅へと帰って来た。

もう一ヶ月以上経つが、どうにもポータルをくぐる時の感覚に慣れない。

エレベーターが動き出す時のような、あの不安定な感じに背筋がゾワツとするのだ。

なんとかならないものか。

ま、それはさて置き。

今日は三月十四日。世に言う、ホワイト・デーである。

きつと本命だろう（と思いたい）チョコを貰った身としては、お返ししないという選

択肢は選べない。

気合いを入れて事前に用意し、忙しない朝ではなく帰宅後に渡すつもりだった。

つまり、今日これからが本番。
長風さんへの……。

一ヶ月前の帰宅直前に「あ、これどうぞ」と、素つ気なく渡された義理チョコへのお返しは、イメトレ通りに出来た。

変に気負わなければ、「彼女」へのお返しも、きつと上手く行く。

それでも若干の緊張は拭えず、深呼吸で気持ちを落ち着かせてから、ただいま、と玄関の奥へ呼び掛ける。

少し間をおいて、パタパタとスリッパの足音が。

出迎えてくれるのは、もちろん「彼女」。

今日はいつものワンピースじゃなく、ブレザータイプの学生服の、黒いインナーの上にエプロンを着けているようだ。

家事の途中だったのだろう。濡れた手をエプロンで拭いつつ、「彼女」は微かに微笑む。

「お帰りなさい。お風呂とご飯と私、ですよね？ 分かっていますよ」

え？ 全部乗せ？

予想外な言葉で断言され、思わず目を丸くしてしまった。

これまでも、新婚家庭の定番である「風呂・ご飯・私」の三択で遊ばれた事はあったが、このパターンは初めてだ。

お風呂と、ご飯と、私……。

いかんいかんいかんいかん。不埒な想像をするんじゃない！

風呂の床に敷かれたバスマットの上で刺身を女体盛りなんて、そんなのあり得ないからっ!!

というか、人肌に温められた刺身とか、普通に不味いだろうし……。でも、一度くらいは食べてみたいような気も……。

「もしかして。エッチな想像、してますか？」

っは!?! な、なんの事かなあー。

いやあ、今日も疲れた疲れたー。

ジト目に覗き込まれ、やっと正気に戻る。

慌てて取り繕うのだが、「彼女」はニンマリ。小悪魔な笑みを浮かべたまま。

ううむ。最近こういう、ちよつとエッチいネタでからかわれる事が多くなつたな

……。

好きな女の子に弄ばれるとか、嬉し恥ずかしな経験ではあるのだけれども、反応に困る。

ま、今のうちだけと思つて楽しんで……もとい、我慢しよう。

「今日の献立は、鯖の幽庵焼きと春キャベツのお味噌汁、筍と春菊の酢味噌和えなどで
す」

お、今日も豪華。楽しみだなあ。

いつものようにジャケットを受け取った「彼女」が、リビングへと歩きながら献立を
教えてくれる。

この家での食事当番は、「彼女」、セイバーさん、キャスターさんが三人で回してい
た。

セイバーさんが用意する、絢爛豪華なローマ式ダイナー。

キャスターさんが生み出す、華やかかつ控えめな和食。

「彼女」の作つてくれる、誰もが心に思い描く家庭料理。

このローテーションが、良い具合に胃袋を刺激してくれるのだ。自分はオマケで食べ

させてもらってただけだが。

最初こそ、「奏者の手を煩わせるなど!」「御主人様に上げ膳据え膳するのは良妻の務めで御座います!」とか言っていたセイバーさん達だったが、「彼女」の手料理という誘惑に勝てるはずもなく、今では「彼女」が当番の日を楽しみにしているようだ。

本当は自分も参加すべきなのだろう。しかし、あいにく自炊スキルは低い。

一回、見よう見まねで作ってみただけ、全員一致で「不味い」と言われてしまったので、当番からは外されてしまった。

仕方なく食費と光熱費だけ入れている。

そんなこんながありつつ、今日も「彼女」の手料理に舌鼓を打つ時間が来た訳なのだが、今の所、リビングに人影はない。

後になったらセイバーさんとかに邪魔される可能性もある。お返し、もう渡しておくべきだろうか?

うん。善は急げとも言う。ここは電撃戦で行こう!

……あ、あー。ところで、さ。

「はい。なんですか」

ネクタイを外し、それを「彼女」に渡すついで……という風体を装い、自分は話を振る。

き、今日は、ですね。

三月十四日、なんです。

「はい。そうですね」

……渡したい物が、あるんです、が。

「はい。待ってました」

呆気なく。しかしド直球に、「彼女」は返事をしてくれた。

抱えたジャケットを抱き締め、ほんのり笑顔を浮かべているようにも。

なんともはや。こんな風に期待してくれていたのなら、用意した甲斐があるというものだ。

自分は早速、携帯端末でシステムコマンドを呼び出し、データストレージから嚴重にロックされた貴重品——お手製マシユマロを取り出した。

これ。バレンタインのお返し、マシユマロ。

アーチャーさんに手伝ってもらったから、味は保証しますです、はい。

「……ふふ。言葉遣い、変ですよ」

妙に畏まってしまう自分に対し、“彼女”はまたクスリと笑う。

なんだか、今日はよく笑ってくれるな。機嫌が良い、みたいだ。

でも、だすつて言わないだけ成長したと思うんですよ、自分も。

「夕飯前ですけど、食べてもいいですか？」

一旦、ジャケットを手近な椅子の背もたれに掛け、“彼女”はマシユマロの詰められた袋を受け取る。

小首を傾げつつの問い掛けには、もちろん、と自信を持って答えた。

休みの日に、厳しいオカンの——じゃない。アーチャーさんの指導の下、彼女に隠れて作り上げた一品。

さきほど自炊スキルは低いと言ったが、監督してくれる人がいれば別なのだ。味は

アーチャーさんのお墨付きである。

「……………」

……あれ。食べないの？

「いえ。食べたいです」

……………お墨付きのはず、なのだが。

なぜか、「彼女」は袋の口を開けただけで、一向に食べようとはしなかった。食べたいと言っているのに、しかし動かない。

こちらをジーツと見つめるだけ。

はて…………？ これはどういった類の意思表示なのだろうか…………？

(ナナシさん。ふおとんれい！ しますか？)

はっ!? 脳内に謎の幼女の声が!?

慌てて周囲を見回してみるも、褐色ロリ家政婦さんの姿はない。

が、きつとあの子はこっちを見てる。どこからともなく、自分達を生暖かく見守っているはず。

早く正解を見つけないと、マジでふおとんれい！（一万分の一くらい）で叱られてしまう！ 頭がアフロになってしまう!!?

「じゅ〜……」

わざわざ擬音を口に出す「彼女」からのプレッシャーも、時間を追うごとに強まってくる。

ううう、考えろ考えろ考えろ。

「彼女」は、何かを待っている？ 状況から察するに、それは自分の起こすアクションで……ん？

食べる。待つ。アクション。

不意に、この三つが脳内で組み合わさった。

これってもしかして、食べさせて欲しいって事なんじゃ……？

ものは試しと、自分は袋の中からマシユマロを一つ摘み上げ、「彼女」の口元へ。

あーん、してくれるかな。

「はい。あーん」

すると、「彼女」は目をスツと閉じ、小さな口を雛鳥のように開けた。

いよつし正解だった！ やったよアルテラちゃん！ 発破かけてくれてありがとう！
後で君にもマシユマロあげるからね？ 義理だけど。

と、脳内で喝采を上げながら、可愛らしい口へとマシユマロを入れる。

……どう？

「美味しいです。ふんわり、甘いです」

もくもく。もくもく。ごつくん。ぱあぁ。

あえて擬音で表現するなら、こんな感じの表情の変化だった。

ゆつくりと噛み締めて味わい、広がる甘さに頬が緩んでいる。

どうやら、「彼女」にも気に入ってもらえたようだ。

アーチャー先生。「湯煎の温度が低過ぎる！」とか、「今度は熱すぎるぞ！」とか、「もつ

と丁寧に攪拌したまえ！」とか、細かく指導してくれて本当に助かりました！

時々イラツとしたというのが本音だけど、自分が作った物を、誰かに美味しいって
言つて貰えるのつて、こんなに嬉しいんだなあ……。

暇な時にでも、料理の勉強してみようつと。

「……あの。もう一個、お願いできますか」

あ、うん。はい、どうぞ。

おねだりの声に呼び戻され、自分はまたマシユマロを一つ、口に運んであげる。

それにしても、アーン待ちしている時の、「彼女」のこの可愛らしさよ。

ちよつとイケナイ気分になりそ——

「……はむっ」

うっ!?

にゆるつとした熱を、指先が感じ取る。

艶めかしい湿り気。指を這う熱さ。くすぐったさと、背筋がゾクゾクする感覚。

自分の指は、摘んだマシユマロごと食べられてしまったらしい。
あ、あの。指、指が……。

「ん……」

しどろもどろに、その事を指摘してみるのだが、
“彼女”はこちらの手をガツシと掴んで離さない。

それどころか、マシユマロはもう溶けてしまったはずなのに、別の物を求めて舌が蠢く。

「ぶあ……。は、ん……。っ」

吸い上げるような水音。

指で感じる熱と吸着感。

しゃぶられている。

ねぶられている。

自分の指を、“彼女”が。

他愛ないはずの兎戯は、異様なほど胸を強く高鳴らせる。

気が付くと、自分は「彼女」を壁に押し付け、覆い被さるようにしていた。指を強引に引き抜けば、細い唾液の糸が、自分達の間繋がついていた。

「あ……。お味噌汁、沸いちゃいます、よ……？」

嫌？

「……嫌な訳、ないです」

少し、低い声で尋ねる。

返ってきたのは、曖昧だけれど、決して拒絶してはいない、甘えを孕む吐息。我慢できなかった。

今すぐに、「彼女」の唇を奪いたくて仕方ない。

NOと言われなかったのだから、もう遠慮する事なんてないだろう。毎度毎度、押し倒されてばかりじゃないって所を見せてやる。

そんな、誰へ向けたかも分からない意地と欲望に後押しされ、「彼女」の顎を撫でる。

まぶたが伏せられ、艶めく唇が上向きに待っている。待っていてくれる。

自分は迷わず、「彼女」唇を重ねた。

「そうはイカのお……！」

「塩辛乗せジャガバターで御座いますー！」

——はすが、なぜか唇に感じたのは、場違いな塩っ気。

それもそのはず。自分と彼女の間には、本当に塩辛乗せジャガバターがあつたのだから。

っっていうか熱っ!? え、出来立て!?

「全く、油断も隙もあつたものではないな！ 虫も殺さぬ顔で、余の見ていない間に、余の奏者に襲い掛かるなど……。恥ふおひへ恥ふお！」

「セイバーさん。ジャガバターを口いっぱい頬張りながら喋るのは、流石に止めた方がよろしいかと。」

そしてモブ男さん。調子乗ってつと、塩辛の空き瓶でコロコロしちゃうぞ?」

いつの間にか現れたセイバーさんが、ジャガバターをフォークでガツつきながら仁王立ちしている。地味に間接キツスしてるのは良いのだろうか。

加えて、平べったいガラス製の容器を両手に構えたキャスターさんは、今にも襲い掛かってきそうな荒ぶる鷹の構えを。こっちも地味に怖い。

だがしかし。彼女達の怒りに、たじろぐ事はなかった。

なぜならば、もつとお怒りな女の子が、自分の腕の中に居たからだ。

“彼女”は底冷えする笑顔を湛え、二人のサーヴァントと相對する。

「セイバー。ジャガバターを食べてるって事は、夕飯は要らないよね。片付けておくから」

「ぬっ!?」ち、違う、これは違うのだっ。溶けたバターと塩辛の絶妙なマッチングにフォークが止まらぬだけであって、奏者の作ってくれた食事は別腹に決まっているではないかあ!?!」

「あちやー。やつちまいましたねえセイバーさん。ま、ご主人様の手料理は、私がセイバーさんの分まで堪能して差し上げますから、ご安心下さい。ぷふぷー」

「ああ、キャスター。お塩が切れちゃってるのを思い出したの。S.E. R.A. P.Hの端

に出来た南米領域まで買いに行つて貰える？ 今すぐに徒歩で」

「にやんとお!？」
「主人様、なんてご無体な事を令呪を輝かせながら仰る!？」
ア
タカマ塩原とか遠すぎですう!？」

静かなる憤激に、二人はタジタジだった。

セイバーさんが縋りつき、キャスターさんが涙を流そうとも、
「彼女」の怒りは治まらないだろう。

というか、このままじゃホントに令呪を使っちゃいそうな雰囲気だ。

「彼女」が怒ってくれてるおかげか、自分は妙に冷静で、ちよつと暴走気味なその肩を叩く。

ええつと。とりあえず、落ち着いて。

令呪はマズいから、ね？

「でも……っ」

よほど、邪魔されたのが悔しかったのだろう。

綺麗な形をした眼に、今度は涙が込み上げている。

自分としてもそれは同じなのだが、これからまたイチヤつくのもアレだし、いいタイミングだ。

「彼女」を一旦下がらせて、シヨンボリと正座する二人の前に。

セイバーさん。キャスターさん。

「な、なんだ。余は謝らぬぞ……。余は、まだお主を認めた訳ではないのだからなっ」
「そうですそうです！　いくら人畜無害なモブ男とはいえ、ご主人様を渡してなるもので——」

はい。これどうぞ。

「ぬ？」

「あら」

ブーイングを遮るように、自分はストレージから二つのアイテムを取り出し、押し付ける。

反射的に彼女達は受け取り、困惑していた。

ある意味、当然だろう。綺麗にラッピングされたそれは、言われずともプレゼントだと分かる代物なのだから。

中身はもちろん、マシユマロである。市販品だけど。

「これはもしや、マシユマロとかいう物か？　しかし、余がこれを受け取る理由は……」
「そ、そうですよねえ……。モブ男さんにチョコなんて差し上げてませんし……」

良いんですよ。

これは、日頃の感謝の証ですから。

「感謝、とな？」

「え。え。どういう事でしょう？　説明プリーズ？」

お二人は、〃彼女〃を護つてくれてますからね。

自分には絶対に出来ないことですし、自分にとつても、〃彼女〃は……大切な、存在ですし。

まあ、市販品なのは申し訳ないですけど……。

いつも、ありがとうございます。

「奈々篠さん……」

ちよつと照れくさくて、視線を逸らしながら、自分は感謝の念を伝えてみる。

何か感じ入るものがあつたようで、「彼女」も矛を収めてくれた。

まあ、こんな機会でもないと言えない事だし、嘘偽りのない本音でもある。

ちゃんと言葉にするのって、大切だ。

「……キャスターよ」

「……なんですか、セイバーさん」

「今、お主の胸の辺りから、『キュン』というトキメキ音が聞こえてきたのだが、気のせい
いか?」

「とっ!?! と、ととつとときめいてなんかいませんことよ!?! こ、こんなマシユマ
口なんて……」

串に刺して炎天でコンガリ焼いて、外はカリカリ中トロトロにして美味しく頂いちゃ
うんですからねっ!?!」

「ふふふ。素直になるが良い、ツンデレキャスター。ちなみに、余もときめいてはおらぬぞで？」

平民が皇帝に貢ぐのは、至極当然の行為なのだからなつ。……ほ、本当だぞつ。よ、喜んでなんかいないからなつ!？」

「どっちがツンデレですかどっちが!」

「なにを!」

珍しいキャスターさんのツンデレに視線を戻すと、二人はいつもの調子で睨み合いを始めていた。

なんだかんだで、この場は納めることができたかな。

キスできなかった事は残念だけど、たまには、こんな日があっても良い……と、思います。

さ。みんなで夕飯、食べましょう。

アルテラちゃんもおいでー? マシユマロ、君のも用意してあるからー!

「わーい! ましゅまろ、初めてですつ」

パン、と柏手を打ち、ついでに適当な場所へ向けて呼び掛けてみると、やっぱり覗いていたらしいアルテラちゃんが、どこからともなく小走りで現れる。

マシユマロをあげる理由？ 特にありません。可愛い幼女は無性に甘やかしたくなる今日この頃です。

そんな自分達に呆れたのか、「彼女」もまた、仕方ないといった風に溜め息をついて。

「……ふう。アルテラ？ 食べるのは夕飯の後で、ですよ」

「はい、マスタ―！」

「むう……。ここで抵抗しては、余の度量が疑われるではないか……。」

仕方ない、今日ばかりは余の負けだつ。

「ほわいとでー」に免じて、我が奏者への非礼、見逃してしんぜよう！」

「どこまでも無駄に偉そうな赤王様ですこと……。」

それはさて置き、今日の食材はこのタマモが用意したんですよ？

そこにご主人様の愛情と手間が加わったんですから、美味しくないはずがありません。んつ。

モブ男さん、ありがたーく召し上がってくださいませね？」

はいはい。分かっています。

険悪だったムードもどこへやら。

すっかり元通りな皆の姿に、自分は苦笑いを浮かべつつ、いつもの定位置に腰を下ろす。

あの日、アーチャーさんが言ってくれたものが。

平穏無事な日常が、ここにあった。

第四話

「記憶喪失、ですか」

静かな声で繰り返す少女に、どうもそうらしい、と呟く。

すぐ近くにあつたらしい公園へ移動し、自分達はベンチに腰掛けている。

情けない姿を晒してしまった事もあり、〃彼女〃の顔もまともに見られなかった。

「何も覚えていないんですか？ その、御自分の名前とか。……あの首輪の事、とか」

問いかけられ、今度は首を横に振る。

〃彼女〃に話しかけられてからというものの、不思議と頭がハッキリしだした。

地に足がつかないような、奇妙な酩酊感もない。

けれど、同時に気が付いた。

自分の中からは、酩酊感以外も、全てがなくなっていた事に。

名前も。年齢も。自分がどこに居るのかも。自分がどんな顔をしているのかすら、全く。

ごめん。初対面の人間にこんな話されても、迷惑だよな。

「いえ……」

相変わらず顔も見ずに謝るのだが、「彼女」は短く、当たり障りのない返事をするだけ。

その反応も頷ける。実際、こんな事を言われても困るだろう。自分だったら、赤の他人にこんな事を言われても信じられないし。

せっかく親切にしてもらったのに、これ以上の迷惑をかけるのは忍びない。

そう思った自分は、やはり「彼女」を見ないまま、ベンチから腰をあげる。

もう行くよ。手伝ってくれて、ありがとう。

「あ」

返事を待たず、そう言い残して歩き出す。

行く当てなんてない。どこに向かつて歩いていっているのかだつて、知るはずがない。それでも、歩かなければ。前に進まなければ。そうしなければ。

どこか、強迫的だとも思える衝動に身を任せ、自分は逃げるように歩き続ける。しかし、一分と経たない内に、違和感に気付く。

一定の距離を保つて、足音が着いてくる。

振り返ってみると、そこには「彼女」が居た。

無表情でありながら、強い意志を滲ませる瞳で、こちらを見ている。

何故だか、無性に気恥ずかしくなり、視線を逸らしてしまった。

……どうして、着いてくるんだ。

「何事も、中途半端つて良くないと思うんです」

は？

思わず口をついた言葉に、「彼女」は素知らぬ顔で答えた。

そして、怪訝な顔をしているであろう、自分の真正面に立ち。

「最後まで、お手伝いします。私、探し物って得意なんですよ」

ほんの少しだけ目を細めて、そう言ってくれる。

その表情に——微笑みに。

自分はただただ、見惚れていた。



おはようございまあーす。

今日も今日とて、社畜として定時に出勤した自分は、挨拶と同時にオフィスフロアへのドアを開ける。

近くを歩いていたNPC社員達が、ルーチン通りに「おはようございます」と返事をし、流れるように自らの受け持つ作業へ戻っていく。

少しばかり淡泊な反応にも思えるが、これが彼等の常なので、もう特に気にはならな

い。

オフィスをちよつと奥まで進み、庶務課長というプレートの置かれたデスクへ。

課長と言えば聞こえは良いが、仕事の内容はそれこそ庶務……様々な雑務ばかりなので、全く偉いと思えないのが残念である。

ともあれ、机について始業の準備を整えていると、すぐ近くにある応接室へのドアから、副社長である長風さんが顔を出した。

「おはようございます、奈々篠さん。早速で申し訳ないんですが、応接室へ来てもらえますか」

あ、はい。分かりました。

挨拶もそこそこに、副社長はクリップボード片手に応接室の方を指差す。

なんだろう？　と思いつつ、断るといふ選択肢もないので、そそくさ部屋の中へ。

「実は、新しい社員を雇う事になりました」

新しい社員？

「そうなんです。いきなりです。社長の拾い癖には困りますよ、全く！」

ボスン、と革張りのソファを軋ませ、副社長がプンプン愚痴を零し始める。

言峰社長の拾い癖。

文字通り、なんでもかんでも拾ってきた商品はしてしまう、ちよつと困った才能の事だ。

普通なら全く価値のない物——テクスチャーがバグって歪んだ木のオブジェクトとか、歪んでいなくちゃダメなのに正確な球体になっている石のオブジェクトとかですら、どこからか欲しがっている人を見つけて来ては、法外とまではいかないけれど結構な値段で売りつける。

リアルわらしべ長者とも言うべき才能だが、そういった物を欲しがる人物を見つけないのは、やはり相応の時間が掛かり、その間はゴミとしか思えない物で、倉庫を圧迫されてしまう。副社長は無駄が嫌いな人なので、そこが嫌なのだろう。

と言つても、である。

社長が拾ってくる物の中には人材やNPCも含まれており、妙に処理速度が速いけど顔文字でしか話さないNPCや、自分のように行き場のない人間なども含まれている。

自分にとっては恩人だし、社長のおかげで救われた人も、確かに居る訳だ。

ここは一つ、自分がフォローしておこう。

まあまあ、そう言わずに。自分も、その拾い癖のおかげで助かった訳ですし。ね？

「そうですけど……」

対面へと腰掛け、宥めるように笑いかけると、副社長も本気で怒ってはいなかったよ
うで、すぐに矛を収めてくれた。

なんだかんだと言いつつ、社長を信頼しているのだろう。

社長も彼女を信頼しているからこそ、副社長という役職を任せているんだろうし。

「とにかく、そういう訳です。今日からここに、住み込みで働いてもらおう新人が入り
ますから。色々と教えてあげて下さい」

え？ 自分が？ 自分より副社長の方が適任では……。

「そろそろ貴方にも、〃人〃の使い方というものを学んでもらいたいと思っていた所な
ので、ある意味ちようど良いんです。大丈夫、貴方なら出来ます」

いきなりの打診に、思わず怖じ気づいてしまう自分だったが、副社長はごく自然に、太鼓判を押してくれる。

な、なんだろう。嬉しいような、怖いような……。

副社長の言い方というか、口振りから察するに、その新人さんはNPCじゃなくて人間、なんだろうか。NPCだったら、特に何も言わずにルーチンワークへ加えるだろうし。

なおさら引き受けるのが怖いけど、副社長からの信頼を裏切るのも嫌だ。出来る限り、やってみよう。

が、頑張ってみます。で、その人は？

「すぐ呼びますよ。入って下さい」

副社長が背後へ呼びかけると、入って来たのとは別のドアの向こうに、人の動く気配を感じた。廊下で待機してたっぽい。

そして、若干の間を置いて「し、失礼します！」と緊張した声が聞こえて……。

この声、女の子？

「は、初めまして！ ふふふ、藤丸 立香と申しますすすっ！ よろしくっ、お願いしま
すっすっ!!」

入室するなり、挨拶と共に勢いよく頭を下げたのは、赤茶色の髪をサイドポニーにする少女だった。

白いジャケットと黒いスカートを身につけ、とても緊張しているのが伝わってくる。
高校生くらい、か。美人さんだなあ…。

「藤丸さんはNPCではなく、マスター適性を持った人間です。

しかし、なんらかの理由で名前以外の記憶を失っているようです」

記憶を……？

「はい……。うさん臭いですよね、あはは……」

おうむ返しする自分に、少女は——藤丸さんは、毛先をクルクルしながら苦笑いを浮

かべた。

なるほど。それで自分が適任なのか。

自分より多角的にハイスペックな副社長でも、流石に記憶喪失の経験はない。

同じ立場である自分なら、副社長自身より藤丸さんの力になれると判断した。いや、信じてくれた。

きつと彼女も不安を感じてるだろうし……。うん。ちよつと気合い入れて頑張ろう。

でも、あんまり気負い過ぎるとそれも伝わってしまうだろうから、出来るだけ自然にかつフレンドリーに。

初めまして。奈々篠と申します。これからよろしく。

「あ……。はいっ！ よろしくお願いします！」

ソファアールから立ち上がった自分は、右手を差し出しながら、改めて挨拶を。

すると、藤丸さんは快活に微笑み、ガツシリと握手で返してくれる。

良かった……。実は挨拶してから、あれ？ 男の上司が女性社員に握手を求めるのつてセクハラか？ とか思ってたけど、どうやらそういう事に敏感な人じゃないらしい。

……でも、なんでだろう。

そろそろ手を離したいのに、藤丸さんがニギニギと握手し続けてるんですが。

こつちから求めた手前、そろそろ止めませんか？　って言うのもアレか。いやいや、逆
にこつちから言うのが正しい作法？

言うべきか、言わざるべきか。

どうすべきか考え込んでいると、ほどなく副社長が「オツホン！」とやけに大きく咳
払い。

そのタイミングで、ようやく自分と藤丸さんの手は離れた。

少しだけ残念に思ってしまう、己の浮気心が憎い。

「では、藤丸さんの事、よろしく頼みますね。……あえてこの場で言っておきますが、変
な気を起こさないようお願いします」

お、お起こす訳ないでしょう!?

なに言い出すんですかいきなりっ。

「だと良いんですが。はい、本日の業務、開始してください」

ジロリ、と上目遣いに睨まれて、自分の返事は上擦つてしまった。
ヤバイ。完璧に見透かされてる……。

「彼女」にも申し訳が立たないし、マジで気をつけなければ。
というかですね、副社長。言うだけ言ってさっさか退室しないで頂きたい。
あんなこと言われた後で二人きりとか、物凄く気不味いんですが!?

「え、えっと。わたし、何をすればいいですか? 先輩」

へ? 先輩?

「はい。わたしよりも先に勤めてらしたんですし、先輩ですよね? ……あ、こう呼ん
じやダメ、ですか……」

どうしたもんかと、ヤキモキしていた所に唐突な先輩呼び。
驚いて問い返せば、元氣一杯だった藤丸さんが、シユンと肩を落としていて。
慌てた自分は、取り繕うようにして否定するのが精一杯だ。

いやいや、そういうんじゃないよ！ ちよつとビックリしただけだから。とりあえず、着いてきてくれるかい？

「はいです、先輩！」

なんとか頭を仕事モードに切り替え、先導して廊下へ出ると、再び元気を取り戻して着いてくる藤丸さん。

こう言つては失礼かも知れないが、藤丸さんつて犬系な気がする。

さっきのシユンとした感じとか、怒られてシヨンボリしてる小型犬っぽかったし、ヒヨコヒヨコと楽しげに着いてくる足音とか、まるでリードを着けて散歩でもしているような……。

ちよつと待て自分。副社長に釘を刺されたばつかなのに、なんで変な事を考えてるんだ。

真面目に仕事しなきゃ……。集中集中！



「うわあ。ギッチリ詰まっていますねえー」

ややあつて、自分達は言峰商會が管理する倉庫にやつて来た。

端から端まで歩いたら、丸つと半日を要するほど広大なこの倉庫は、外から見ると、百人乗つても大丈夫そうな物置に過ぎない。

空間圧縮技術を駆使している、と副社長から聞いた事はあるが、正直、原理は全く理解できなかったもので、とにかくそういうものだと思理やり納得している感がある。

内部は高さ3 m程の棚が整然と続いており、これまた整然と大型パッケージが納められ、天井は更に高く5 mくらい。

こんなに巨大な倉庫でも、余剰スペースは常にカツカツなんだから、本当に我が社の収集能力は恐ろしい。

今日は、倉庫の在庫管理をする予定だったんだ。手伝つて貰えるかな？

「はい、もちろんです！ 頑張ります！」

ははは。藤丸さんは元気が良いなあ。

でも、下手をすると命に関わるから、慎重にね。

「分かりまし——えっ。命に関わる？ 在庫管理が？」

元気一杯な藤丸さんに注意を促すと、彼女はキョトンと目をパチクリ。小首を傾げる
仕草がまた犬っぽい。

うんうん。自分も最初はそういう反応だった。懐かしいなあ……。

冗談に聞こえたかも知れないけど、マジだから。

はいこれ、抗呪のアミュレットに、不死鳥の尾羽と、強制離脱ポータルキー。
使い捨て型になってるけど、その分、効果は強力になってるよ。

「はあ……」

業務開始に先駆けて、備え付けの備品を藤丸さんへ渡す。

十字架型の首飾り。どこかで見た事のありそうな赤い鳥の羽。細長いジツポーライ
ターみたいなスイツチ。

どれもこれも、社長直々に装備を義務付けられている、防御礼装だ。この会社がどんな仕事をしてるのかは、もう聞いたかな。

「長風さんから、少しだけ。物流を管理したり、直接品物を手配したり、ですよね？」

そう。端的に言えば卸問屋みたいな感じなんだけど、霊的な物を扱う関係で、どうしても危険な品物が出てくるんだ。

この倉庫も、通常では考えられないほどの防御結界がしかれている……らしい。自分にはサツパリだけどね。ははは。

「そ、そうなんですかー。あは、あはははは……」

自分が笑うと、藤丸さんもそれに合わせて笑ってくれる。

若干引きつつているのは気のせいだと思う事にしよう。そうしないと仕事が進まないからね。

詳しい事は分からないのだが、魔術師の間では封印指定とか呼ばれるんだかんだが、この倉庫には相当数置かれているようだ。

黄金の蜂蜜酒（一万倍希釈）とか、新酒^{ソーマ}のソーダ割り（炭酸はもう抜けてる）とか、齊天大聖の鼻毛（白髪）とか、エミグレ文書（落書きされてる）とか、バルスの断章（背表紙だけ）とか、ルルイエ異本（二次萌え系の薄い本にしか……）とか。
正確にはコピー品のコピー品のコピー品みたいな粗悪品だが、逆に不条理な効力を発揮する場合が多いとのこと。

自分は完璧に封印されている状態しか見た事がないので、正直眉唾なのだけでも。

まあ、初日からそういう封印指定物の管理はさせないから、安心して。

まずは普通に、新しく一時保管した品物とかの在庫管理をしよう。

「あの……。同じ倉庫にそういう物があるってだけで、冷や汗が止まらないんですけど……」

大丈夫大丈夫。

自分もそうだったけど、二週間もすれば慣れるから。

さあ行くよー。

「は、はい……」

やや強引に話を切り上げ、自分はまた藤丸さんを先導する。

怖がる気持ちは凄く分かるけど、実際、なんの魔術の心得もない自分が今でも生きてる訳だし、封印が破れそうになったのも一〜二回だけだし、大丈夫だろう。

きつと大丈夫。大丈夫なはず。大丈夫だと思いたい。大丈夫であれ。たぶんダイジョーブ。

よし、自己暗示終了！ キョウモ、イチニチ、ガンバロウ！

「ふう。在庫管理つていつでも、けっこう歩くんですね」

無駄に広いし、実質は仕分け作業だからねえ。

自分を誤魔化しながら仕事を続けて、早数時間。

順調に作業は推移し、予定していた行程の七割を消化していた。

品物をコンソールで分析してトレスからタグを付け、一時保管用の棚に、分類して積んでいくという単純作業だ。

人間では運べない物——大きかったり重かったりした場合、運搬用ドールを使って

運ぶ。

大した作業でもないのだが、藤丸さんの飲み込みは非常に早く、自分一人での作業に比べて、効率は格段にアップしている。

特に、ドールの扱いが上手い。

自分の場合、使役用のコントローラーを使わないとドールを動かせないのだが、マスター適性を持つ彼女であれば、文字通り手足のように動かせるようだ。

曰く、「頭で考えればいいだけだから結構ラクちんです。でも、うっかりすると力加減とかを間違えそうで怖いですね」だとか。

作業に没頭したおかげか、封印指定物の存在も、いい具合に忘れてくれたみたいである。

時間的にはお昼。丁度、十二時を少し回った。

そろそろ集中力も途切れる頃合いだし、腹の虫も鳴き始めている。

作業に一区切りをつけて、昼食タイムと行きたいところだ。

いい時間だし、これを積んだら昼にしようか。

「あ、はい！ わたしやります！ あの棚の上ですよね？」

え、あ、そうだけど、でも……。

「大丈夫、まっかせて下さい！」

カテゴリ：貴重品／サイズ：小／重量：軽／備考：破損しやすい、とタグ付けしたばかりのパッケージを持ち上げ、すぐ近くの棚へ駆けていく。

下の方は既に埋まっていたため、脚立を使う藤丸さんなのだが……。

一段、また一段と登るたび、黒いスカートが素晴らしい塩梅でヒラツ、ヒラツと、男心を揺さぶった。

む、無防備過ぎる。このままだと見えてしまうっていうか見るな自分！

いやでも、チラツと見えちゃったくらいなら事故……いやいや駄目に決まってるだろ。静まれ欲望、引っ込め煩惱！

「先輩、終わりました！……って、なんで目を逸らしてるんですか？」

必死に男の本能を抑え込む自分に対し、藤丸さんの不思議そうな声が降ってくる。

こんな言い方をするって事は、小悪魔チックな「見せてんのだよ」攻撃じゃなく、素で

やってるって事か。

セクハラっぽくなっちゃうけど、今後を考えれば、今この場で正直に言った方がダメージは少ない、はず。頑張れ自分っ。

た、大変、言いにくい事なんですけども。

藤丸さん。君、自分がスカート履いてるって分かってる？

「え？ ……………はうあつ!？」

全く考えてませんでした、という風にしか聞こえない悲鳴。

多分、慌ててスカートでも抑えてるんだろう。

それだけなら良かったのだが……。

「あつ、わ、ちよ、ダメ、ダメ……っ!？」

間を置かず、今度はバランスを崩してしまったような声が。

反射的に顔を真正面に戻すと、案の定、両手でスカートを抑えたせいで、脚立の上から落ちそうになっている藤丸さんが居た。

フラフラ、ユラユラ。辛うじてバランスを保っていたけれど、すぐに限界が来て。危ない！

「ひいやあああつ!?!」

飛び込むまでの躊躇は一瞬。

けれど、その一瞬こそが重要だったらしく、藤丸さんを受け止めようとした自分は、彼女の下敷きになるのが精一杯だった。

ドスン。

速度の乗った衝撃と共に、強く床へ叩きつけられる。

……が、不思議と痛くない。あれ。結構強めに、後頭部を打った気がしたんだけど……?

まあいい。男の自分より、女の子な藤丸さんが優先だ。

藤丸さん、大丈夫？ 怪我は？

「……は、はい。らいじよぶれす」

なんとか腕の中に収まっていた藤丸さんだが、衝撃で少し目を回しているようだ。でも、可能なら早めに退いて欲しい。

こうしていると、彼女の体の細さがダイレクトに伝わってきて、色んな部分がヤバイ。ヤバイのに、何故だろうか。彼女はボウっとした目つきのまま、自分の上に居座っている。

……あの、藤丸さん？

「ほお……。へえ……。ふむふむ……」

ベタベタ。スリスリ。ペタペタペタ。

藤丸さんの小さな手が、胸板とか腕とかを這い回った。

ちよ、ちよつと、くく、くすぐったいんですが!?! 何してるのさ!?!

「あ、ごめんなさい。男の人って、意外とガツチリしてるんだなあと思ひまして。なんか手が勝手に」

驚いて苦情を申し立てると、藤丸さんは自分の上から移動。ちよこねんと隣に正座し

た。

危なかった……。あのままだったら、今日初めて出会った相手の手で、イケない気持ちになつてしまう所だった。貞操の危機を感じたよ……。

と、とにかく、無事なら良かった。

初日から新人の女の子に怪我させたとあつては、申し訳ないしね。

「うう、すみません。ご迷惑をお掛けしました……。でも、スカートの中を覗いたんですから、お相子ですよね？」

何をおっしゃる藤丸さん。

覗いてなんていませんですよ。

「ほんとーですかあー？ 長風先輩に相談しちゃおーかなー」

ごめんなさい。チラッと目を奪われました。

でも中身は見てませんので！ 誓って！

「正直で大変よろしいです。今回だけは許してしんぜよう。……なんちゃって」

戯けたやり取りの後、自分達は小さく笑い合う。

ちよつとばかりワザとらしいが、これからギクシヤクしないためには、必要な事だったと思える。

事実、自分が藤丸さんと不必要な接触をしてしまった……罪悪感？　みたいなものは和らいだし、彼女も特に変わった様子は見られない。

もともと気にしてなかったようにも見えるが。そういう相手として見られてないんだらうか。なんだか寂しい。

さてさて。

アクシデントはあったけれど、今度こそ昼食タイムだ。

未使用のパッケージを椅子代わりにして、自分はインベントリから弁当を取り出す。

いつもは「彼女」が作ってくれるが、今日は自分で作った。

アーチャーさんに料理を教えて貰ったものの、まだまだ茶色の多い弁当だ……。野菜もバランス良く入れなければ。

藤丸さん、昼ご飯は？

「あ、はい。買ってあります。特大コロツケパンです！」

スカートのポケットをゴソゴソし、藤丸さんが30cm以上はありそうなコツペパンを取り出した。

間にはパンからはみ出るほど大きなコロツケが、野菜と一緒に四つは挟んである。

明らかにポケットじゃ入り切らないサイズだけど、S.E. R.A. P.H.ではよくあるので驚く事ではない。

そして、この世界のコンビニ食には、品物自体に温め機能が付与されており、開封時にオートで適温となる。

しかも常に出来立てという素晴らしい仕様。時間が経ったコロツケパンでも、衣はサクサクなのだ。

もちろん、温めないという選択も可能で、しんなりしたコロツケが好きならそれも選べる。まさに至れり尽くせり。S.E. R.A. P.H.万歳である。

それにしてもデカイコロツケパンだなあ……。

ほ、本当に大きいね。食べ切れるの？

「このくらい余裕ですよー！ 好物みたいですし！」

みたい、つて……。

「はい。わたし、自分の好物も覚えてないので、なんとなく惹かれる物を選んでみました」

あつけらかんと、藤丸さんはコロツケパンにかぶりつく。

サクツと美味しそうな音が聞こえ、実際そんなのだと表情が教えてくれる。

そうだった。平然と振る舞ってはいるが、彼女は記憶を失っているんだ。

自分はもう吹っ切れているけど、彼女はどうかんだろう。

同じ境遇の人と出会ったのは初めてだし、色々と話してみたい気持ちはある。

少し、踏み込んでみようか。

気分を害するかも知れないけど、君の事を聞かせてもらってもいいかな。藤丸さん。

「……大丈夫です。そんなに気を使わないでください、先輩。なんなら、立香ちゃんつて名前で呼んでくれても構いませんよ?」

いや、流石にそれは止めておくよ。
出会ってまだ一日も経ってないし……。

「ですか。ちよつと残念です」

藤丸さんなりの社交辞令だったのだろう。

それほど落胆している様子もなく、「なんでも聞いて下さい」と言ってくれた。
その言葉に甘え、自分は箸を休めて、思いついた質問を投げかける。

SE. RA. PHに来てどの位なんだい。いつ頃まで記憶を振り返られる？

あと、藤丸 立香っていう名前は？

「んー。覚えてるのは、一週間くらい前までですね。

名前は、なんで分かりませんが、これだけは覚えてたんですよ。

ひよつとしたら、わたしの名前じゃなくて、友達とか知り合いの名前かも知れません」

一週間……。じゃあSE. RA. PHに来たばかりか、もしくはSE. RA. PHで
何かに巻き込まれた可能性があるのか。

名前も確かに、自分は言峰社長がつけてくれたけれど、覚えているものが自分自身の名前ではない事だつてある。

最初の記憶から「彼女」の存在があつた自分つて、やっぱり物凄く幸運だつたんだ。マスター適性を持つているらしいけど、その自覚はあつたのかな。

自分の才能を理解していたのか、それとも言われてから気付いたのか……。

「あ……。曖昧ですけど、どちらかと言えば後者ですね。サーヴァント、つていう使い魔？ にも心当たりはなかつたです」

左手でサイドポニーの毛先をクルクルしつつ、少し上を向きながら藤丸さんが答える。

ごく普通に、世間話でもするような気軽さがあつたが、しかし、不意に切なげな表情を浮かべ、「ただ……」と呟く。

「ふとした瞬間に、誰かの顔が頭に浮かんだりするんです。

大きな盾を持った、ショートカットの女の子とか。

すつごく勝ち気な表情の、ロングヘアの女の子とか。

名前も思い出せないのに、凄く親近感があつて。でも同時に、寂しくなるような……」

消え入るような声。

途切れてしまった会話は、記憶を失った少女の心を反映したかのようで。

どう慰めればいいのか迷い、声をかける事すら出来なかつたが、そんな自分を逆に氣遣つてくれるのか、藤丸さんは沈黙を苦笑いで誤魔化す。

「あ、こんなこと言われても困っちゃいますよね。」

えっと、わたしからも質問させて下さい。先輩は、どうしてこのお仕事を？」

え？ 副社長から何も聞いてない？

「はい。親睦も兼ねて、そういう事は本人から聞いて下さい、って」

……そう。

てつきり事情を知らされると思っていたのだが、違ったようだ。

いや、よく考えれば副社長らしいか。

人の込み入った事情を勝手に話すなんて、下世話な事はしたくありません……とか、メガネの位置を直しながら言いそうな気がした。

勝手な想像だが、なんだかそれがおかしくて。自分は小さく笑いながら、訝しげな藤丸さんへと説明する。

自分も、君と同じなんだよ。

「……同じ、ですか？」

この世界に降り立った時、自分には記憶がなかった。

君と違って、名前すら覚えてなかったんだ。奈々篠って名前は社長に貰った偽名。同じと言っても、残念ながら魔術回路は持ってないけどね。

「あ……。ごめんなさい……」

気にしなくて良いよ。

というか、どうして謝るのさ。

「な、なんとなく?」

申し訳なさそうに表情を暗くした藤丸さんが、今度は小動物的に小首を傾げる。でも、自分が彼女の立場だったら、同じように謝っていたように思う。

だからこそ分かる。なんとなく謝るといふ行為は、相手に嫌われないための自衛行動だ。

己という土台が。それを支える記憶がスカスカになっっている状態で、誰かから嫌われるという事は、恐ろしいほどの不安を感じるから。……自分も、そうだった。

けれど、今は違う。「あの子」が自分とS.E. R.A. P.Hを繋げてくれたおかげで、もう。

ここがどんな世界なのかも、自分が誰なのかも分からない。

普通だったら途方に暮れる所だけど、幸い自分には、助けてくれる人が居た。

そのおかげで、今の自分があるんだ。感謝してもしきれないよ。

「……………」

こんな事、君の前で言うべきじゃないのかも知れないけど。

今の自分にとって、過去の自分は……昔の記憶は、もうどうでも良いんだ。そんなことを考える暇がなくて忙い忙しいし、生活も満ち足りてる。

きつと、昔の自分が今の自分を見たら、羨ましくて仕方ないんじゃないかな。

「そっかあ……。ふふっ」

記憶喪失の先輩として、あまり不安に思う必要はないと伝えたかったのだが、藤丸さんは吹き出すように笑った。

あれ？ 笑うところ？

な、なんか自分、変なこと言ったかな。

それとも、変な顔してたとか……。

「ううん、違います。なんていうか先輩、凄く嬉しそうに話してたから。先輩は今、凄く幸せなんだなあと思って」

不安になって問い返すと、大きく首を横に振った後、藤丸さんは、何か眩しいものでも見るように目を細め、優しく微笑む。

キッチンと意図が伝わっているようで安心したけれど、なんだか急に気恥ずかしくなり、無意味に髪を触ったり、弁当をかき込んだりして紛らわす。

しばらくは藤丸さんも無言でコロツケパンを食べていたが、不意に「わたしも……」と口を開いた。

「わたしも、先輩みたいになれるでしょうか。」

記憶がなくなつて。自分の事が分からなくなつて。

そんなの関係ないって思えるくらい、強く……」

ほんの少し、背中を丸めて。己自身へと確かめるよう呟かれた言葉には、本人も気付いていないであろう、弱音が隠れているように感じられる。

記憶がなくて心細い。自分が分からなくて不安で仕方ない。

気にしない風に振舞っていても、本当は気掛かりで夜も眠れない。

まあ、これも自分がそうだった、という経験からなのだが、違っているとも思えなかつた。

自分は強くなつてないよ。

一丁前に先輩面してるけど、まだまだ、みんなに迷惑を掛けっぱなしさ。

……でも。

「でもっ。」

こちらを見つめる一対の瞳が、言葉の続きを求めている。

ご大層な事なんて言えないけれど、これがきつと、藤丸さんの先輩として出来る、数少ない事だから。

静かに呼吸を整えて、真つ直ぐに彼女を見つめ返し、率直な気持ちを伝える。

迷惑を掛けたり、掛けられたり。助けたり、助けられたり。

そういう繋がりが、今の自分を形作ってくれたと思うんだ。

だから、藤丸さんも遠慮なく、みんなを頼ればいいよ。

副社長も、自分も。できる限り力になるから。

社長は……あの人は、色んな意味で代償を覚悟しなくちゃ、頼れないけどね。

「……あははっ、なんですかそれー。社長に言っちゃいますよー?」

ちよ、それは勘弁して！ 後でジューズ奢るからっ。

「わ、やった。ご馳走になりまーす！」

口下手なりにオチをつけてみた所、藤丸さんの肩からは力が抜け、年頃の少女らしい、愛嬌のある笑顔を浮かべる。

どうやら、ちよつとは氣を樂にしてくれたらしい。

情けは人の為ならず。

こうして誰かの助けになる事が、巡り巡って、自分や「彼女」の助けになってくれたら。

そして、いつか藤丸さんも、自分自身を取り戻してくれたなら、もう言う事はない。以降は和やかな雰囲気の中、軽い雑談を交えて昼食を終える。

お腹も膨れ、氣力十分。

パツケージから腰を上げ、休憩時間は終了だ。

さて。そろそろ仕事に戻ろうか。

「はいっ」

藤丸さんは元気よく立ち上がり、サイドポニーもピヨンと跳ねる。

一人だと憂鬱にしかならない単純作業だが、誰かが隣に居てくれるだけで、不思議とやる気が違う。

可愛らしい女の子の後輩だから、という部分が大きいのだろうけど、我ながら現金なものだ。

う〜ん。そろそろ本気で怒られそうかな……。鼻の下を伸ばさないように注意しなきゃ……。

「ありがとうございます。先輩」

心の中で自戒していると、唐突に藤丸さんが呼びかけてきた。
なにが？ と肩越しに振り返れば、彼女はまた小さく微笑み。

「なんでもないです。藤丸 立香、午後も精一杯働かせて頂きます！」

ピンと背筋を伸ばして、右手で敬礼。

同時にウインクして見せるという、女子力の高さを發揮するのだった。

……そういう事されると男は簡単に勘違いするので、止めようね藤丸さん。

と、ここで終わればまだ良かったのだが。

「さあ。このシャツに着いた淡いピンク色のキスマークについて、ご説明して頂けませんか」

目の前には、自分が脱いだワイシャツ片手に怒髪天を衝く、セーラーエプロンな般若様……もとい、“彼女”が立っていて、そうは行かなかった。

自分？ ジャージ姿でリビングの板の間に正座してますが何か？

いつものように帰って来て、部屋着に着替えるまでは普段通りだったのだが、着替えて戻つてみると“彼女”は天使から般若様になっていた。

物凄く正座が辛いです。セイバーさんとキャスターさんは、いつもと違う衣装で遠目

にニヨニヨと笑っています。

助け舟くらい出してくれたって良いんじゃないですかねえ!? ポテチ食ってないでさあ!?

「聞いているんですかつ」

はいつ、聞いておりますつ。

観戦モードなサーヴァント達に恨みがましい目線を送っていると、*“彼女”*の厳しい声が飛ぶ。

今まで、セイバーさんとかキャスターさんに怒っている姿は見てきたが、自分に向けられるとこんなに居た堪れないとは……。

とにかく、どうにかしてこの苦境を乗り切らねば。言い訳しなければ!

あの、あのですね。それは多分、会社に入った新人の子を抱き留めた時に……。

「抱き留め……っ!」

あ。ヤバい、早速しくじった。

ただでさえ釣りあがっていた形の良い眉が、左右非対称に釣りあがっていく。目はギラギラと輝き、激情が渦巻いているのは火を見るよりも明らかだ。

いや、言葉が足りなかつただけで、キチンと説明すれば！ まだワンチャンある！
ち、違うんだよ！ 誤解しないでくれっ、自分はあの子を助けただけで……。

「言い訳は見苦しいぞ、平民よ。だがしかし、余は見直したぞ？ お主にそんな甲斐性があつたとはな。のう、タマモよ？ 余も生前は放蕩耽つたものよ……」

「何を言ってるんですか、全く。ご主人様の側で生活する榮譽を賜っておきながら、他所の女に目移りするだなんて。これだから男子はヤなのよ！ ねーご主人様ー？」

余計なちやちやを入れる二人のサーヴアントは、かたやTシャツにホットパンツという姿でソファに寝そべり、かたやワイシャツ&スカート+ネクタイ×腰巻き上着でクイックル掛けという、言葉に困る格好だった。

太ももが目には嬉しいセイバーさんはともかく、言動や着る物だけでも真似ればJKになれると思つたのだろうか、この駄狐さんは。ちよつと可愛いのが逆にムカつく。

ううむ。どうすれば切り抜けられるのか……。

頭を抱える自分だったが、そこへ横合いから割り込んでくる影があつた。

こ、この真つ白な割烹着と褐色の肌は、まさか！

「まっつてください！　ちゃんとナナシさんの言いぶんも聞かなきゃダメです！」

あああ、アルテラちゃん。

こんな状況でも自分の味方をしてくれるなんて、君こそこの世界に遣わされた女神様だつ。

ありがとう、ありがとう！

「ナナシさんの話を聞いて、それからどうオシオキするのかを決めるのが、正しい文明のありかただと思いますつ。ですよ、マスター？」

ガツデム！　女神は女神でも罰ネメシスの女神かつ！

助け船かと思いきや、お仕置き確定みたいな言い方をするアルテラちゃん。

思わず悲鳴を上げてしまうが、「彼女」は全く意に介さず、極めて冷静に話を進める。

「アルテラの意見を採用します。話して下さい。洗いざらい、正直に。良いですね」

まるで脅迫でもするかのように、「彼女」は顔をずいっと寄せる。

ああ、怒った顔も可愛いですねー。間近に見ると眉間のシワまでクツキリー。

このタイミングで言ったら火に油を注ぐだけだから、絶対に言えないけど。

っていうか、本当にさつき言った通りなんだよ。

その子と一緒に倉庫整理をする事になって、たまたま脚立で高い所に積んだ後、バランスを崩したから……。

「助けに入った、と」

こくこくこく、と何度も頷く自分。

じいー、と「彼女」はこちらを見つめ続けている。

目を逸らしたい気分ではあったが、何も後ろめたい事はしていないんだ。

信じてほしいという気持ちを含め、自分も見つめ返す。

すると、ややあつて「彼女」は「ふう」と溜め息をつき、表情を柔らかくした。

「状況は理解できました。……すみません、早とちりをしました」

「なんだ、もう審判は終わりなのか、奏者よ？　余はつまらぬ。もつとこう、『意義あり！』と言いなから指を突きつけたりだな」

「セイバーさん？　それ、さつきまでやってたゲームの話じゃないですか。」

リアルな裁判であんな事しませんよ。ま、つまらないという部分には同意ですけどー」

「ごかいがとけて良かったですね、ナナシさん？　ナナシさんに『ふおとんれい』するのは、ちよつとかわいそうだと思ってたので」

「彼女」の怒りが鎮火した瞬間、リビングに張り詰めていた緊張感も霧散する。

はあああ……。なんとか助かったようだ。

話せば分かって貰えると思っていたけれど、疑われている最中のヒヤヒヤ感は、電脳体でも心臓に悪い。

二度と味わわずに済めば良いのだが……。

「所で、ですけど」

あ、はい。なんでございましょう。

「その、新入社員という人は。……か、可愛いん、ですか」

反射的に姿勢を正してしまつたが、「彼女」は何を思つたのか、ペタンと自分の前に座り、気まずそうに様子を伺っている。

これは、アレだろうか。もしかして、嫉妬してくれてる？

どうしよう。微妙に嬉しいというか、チラチラとこつちを上目遣いに見る姿が、やたらめつたら可愛いんですけど。

しかしこの場合、なんと答えれば正解なんだ？

嘘なんてつきたくないけど、目の前で他の女性を褒めるのも問題だろうし。

とりあえず、ご機嫌を取りつつ話を逸らした方がいい、か。

いや、えつと。

自分としてはですね、君の方が好みで……。

「ありがとうございます。でも私の事はどうでもいいんですよ。

その子は「貴方」にとつて、可愛いと思える容姿をしているのが重要なんです。

さあ、正直に答えてください」

しかし残念。『彼女』は誤魔化されなかった。

分かっちゃいたけど聡明だね！ そんな君が大好きだけど、将来的に尻に敷かれるの確実でちよつと憂鬱だ……。

仕方ない、ここは正直に、自分の第一印象を話そう。

こ、好感は、持てると思う。

人懐っこくて、明るい笑顔の似合う、良い子だよ。

「……そう、ですか」

それきり、『彼女』は黙り込む。

沈黙。

焦りを感じさせた先程までの緊張感とは打って変わり、ただただ息苦しい緊張感が漂った。

いつもはやたら騒がしいはずのサーヴァント達ですら、一様に静まり返っている。

沈黙が、続く。

「奈々篠さん」

やがて、「彼女」はおもむろに口を開く。

「私は、「貴方」を信じます」

真摯な瞳が、こちらを真つ直ぐ見据えている。

その美しさに射抜かれたのも束の間、緩やかに下がる目尻からは――

「信じます。信じています。けど、もし「貴方」が、私以外を……望む、なら……うつ、ぐす……うつ」

――透明な雫が溢れ始めた。

嘘つ、泣かれたー!?

「こらナナシノ!?! お主、余の奏者を泣かせるとはどういう見なのだ!?!」

「大丈夫ですか、ご主人様? はい、お鼻かみましようね、ちーん」

「マスター、泣かないで……」

途端、*「彼女」*の周りに三騎のサーヴァントが、外敵から守るかのように集結する。ポテチを突きつけるセイバーさん。甲斐甲斐しくティツシユを差し出すキャスターさんに、頭をポンポンして慰めるアルテラちゃん。

そして、肩を震わせながらちーんし、ボロボロと涙を零す*「彼女」*。
少しして落ち着きはしたのだろうけれど、涙目、鼻声のまま俯く。

「つすん、はあ……。すみませんでした……。*「貴方」*と他の誰かがイチヤイチャしつづ歩いてる所を想像してみたら、思いのほかダメージが大きくて……」

そ、そうなんだ。

すこぶる落ち込んだ様子で、*「彼女」*は頭を下げる。

そんな事で？　とも思ったが、*「彼女」*がイケメンと腕を組んでいる所を想像してみたら、一瞬で死にたくなるくらいグサツと来たので、軽く見てはいけない。

こんな風に落ち込んでもらえるくらい、自分は想われているという事なのか。

もちろん自分も*「彼女」*の事を想っているけれど、今回は色んな意味で不安にさせて

しまった。反省しなければ。

というか、色々とスツ飛ばしてキスとかしちやつてるが、自分の気持ちを言葉にした事ってあっただろうか？

記憶している限り、感謝の気持ちを伝えたり、大切だと言った事はあったと思う。しかし、気持ちを具体的に言葉にしたりはなかったような……。

これじゃ駄目だ。

泣いてる顔も落ち込んでる姿も愛おしいけど、むやみに不安にさせるようじゃ、*彼女*の想い人として失格だ。

あのさ。舌の根も乾かないうちに、こんなこと言ってたって、信じてもらえないかも知れないけど。

「……はぐ」

もともと正座していたが、改めて背筋を直し、*彼女*を見つめる。

真剣な気持ちを察したのか、*彼女*も見つめ返してくれた。

じ、自分は、君だけだから。

自分は、君を、あ……あい……愛し……。

「……………」

何を言わんとしているのか、もう理解しているのだろう。

「彼女」は胸の上で手を組んで、眼差しに期待を込めているように見える。

意外にもセイバーさん達まで空気を読み、固唾を飲んで見守ってくれて。こんなチャンス、二度とないだろう。

言え、言うんだ、今こそ言うぞ！

自分はっ、君の事を愛——

《ドツカーン》

「ここで会ったが百年目！ その破廉恥男っ、乙女のピュアピュアハートにドギつい……：：：らら、ラブシーンを見せつけた罪、そして子リスの唇を穢した罪！ その命で贖いなさあああいつ！」

リビングの壁を突き破り、登場したのはメイド服なドラ娘さん。

モツプを槍代わりに、鼻息荒くこちらへ突きつけている。そう、唐突なお邪魔キヤラの登場にビックリしている自分へと。

「エリザベート……。流石の余でも自重したというのに、このタイミングはないぞ……」
「場の雰囲気を読むって事を知らないんですか？ これだから、いつまで経っても小間使いから抜け出せないんですよ。っていうか借金増額ですからね」

「あ、あれ？ 何よこのアウエー感。まるで私が空気の読めない痛い系女子みたいじゃない!？」

あなた達とは同じ気持ちだと思ってたのに!

的な裏切られ感を醸し出すバートリーさんだが、どちらかと言えば裏切られたのはこちらである。何事もなく言えるだろうという予想をだけど。

頑張ったただけなあ……。勇気を出して、愛してるって言うつもりだったのになあ……。なんかもう、悲しい……。

「大丈夫ですよ、ナナシさん。おジャマ虫はすぐにフォトンレイ(ガチ)して消し炭にしちゃいますからね」

「ちよつとお!! なんかそのロリっ子、メツチャ物騒なこと言ってるんですけどー!?
ここ、子リスは私の味方よね? こんなに可愛いエリちゃんが消し炭になるなんて、あ
り得ないわよねっ?」

絶妙なタイミングで横槍を入れられ、遣る瀬無さにうな垂れていると、アルテラちや
んが優しく頭を撫でて慰めてくれる。

その暖かさに癒されるのは確かだけど、発言内容が超物騒なものも確かだ。人死にが出
るのはマズい。

「いったい『彼女』は、バートリーさんをどうするつもりなのか。」

様子を伺ってみれば、予想外にも満面の笑みを浮かべ、しかし、グツと立てた親指を、
無慈悲に下へGo To Hell。

次の瞬間——

「どうしてこんな役割ばつかなのよおおーっ!」

——悲鳴をあげるバートリーさんに、三色の光剣が襲い掛かるのだった。

自分が『彼女』に愛してると言える日は、案外遠いのかも知れない。

あー、家具が薙ぎ倒されていくー。

バートリーさん頑張ってー。

後味悪いから死なないでくださいねー。でも適度に痛い目見てねー。